

ミュージズ NO.19 平和のための博物館・市民ネットワーク通信

発行：2007年5月

編集：山辺昌彦、山根和代、安斎育郎

翻訳：池谷りさ

イラスト：戸崎恵理子

事務局所在：東京大空襲・戦災資料センター内 山辺昌彦気付

住所：東京都江東区北砂1-5-4

Tel: 03-5857-5631 Fax:03-5683-3326

全国の平和博物館、平和資料館などの活動について、お知らせします。平和博物館国際ネットワークの Newsletter はまだ発行されていませんので、こちらに入ってきているニュースだけお知らせします。

「平和のための博物館・市民ネットワーク」 第7回全国交流会の案内

2007年12月1日(土)午後1時～6時と2日(日)午前9時～午後3時の予定で、5月4日開館した「戦争と平和の資料館 ピースあいち」3階で「平和のための博物館・市民ネットワーク第7回全国交流会」を開催します。

1日夜に懇親会を開催する予定です。

1日午前11時からと2日午後3時過ぎに、5月4日に開館した「ピースあいち」の展示を見学できます。

報告者を募集しますので、ご希望の方は9月末までに、事務局の山辺まで申し込んでください。報告時間は1人30分以内です。報告者は報告レジюме・資料などは各自でご用意ください。

交流会では、「平和のための博物館・市民ネットワーク」の会計・事業報告をしますが、「平和のための博物館・市民ネットワーク」のあり方についても討論します。特に、2008年10月には世界平和博物館会議が京都の立命館大学国際平和ミュージアムを会場に開催される予定です。これを踏まえて、2008年の全国交流会の持ち方についても討論します。是非事前に事務局までご意見をお寄せください。宿泊などは各自で確保して下さい。

報告者としてではなく、交流会に参加のみの方も9月末までに、事務局へ申し込んでください。

「ピースあいち」は名古屋市営地下鉄東山線一社駅下車徒歩13分で、住所は名古屋市名東区よもぎ台2-820、電話・Faxは052-602-4222です。

山梨平和ミュージアム開館

2003年7月、山梨戦跡ネットが母体となって「山梨平和資料センター準備会」が結成され、2005年夏を目途に、山梨に平和資料センターをと県民によびかけました(よびかけ人代表は、小出昭一郎山梨大学元学長)。準備会はその後、賛同募金を幅広く呼びかけるとともに、平和の集いや、戦争体験記『伝えたいあの戦争』の刊行等に取り組んできました。

06年7月、甲府市中心部に建設予定地を決定、12月に着工、3月24日には、『戦略爆撃の思想-ゲルカ、重慶、広島』の著者・前田哲男氏を迎えて、講演会を実施、賛同募金も、のべ700人の個人・団体から2300万円を超えるところにきました。



erico

4月21日に甲府市朝気1丁目で40名が参加し、竣工式を行いました。準備会の春日正伸、浅川保らが、「戦争の事実を明らかにし、平和を発信する拠点として発展させたい」と挨拶、5月26日のオープンに向けての抱負を述べました。当日のNHK、UTYテレビや翌日の山梨日日、朝日の各紙で大きく紹介されました。

5月26日には、開館しました。展示では、甲府空襲などの戦争と平和関係の他、山梨出身で軍国主義に反対し、平和主義を貫いた偉大な言論人・石橋湛山や、私の展示コーナーなどもあります。全国からの見学を期待しています。

山梨平和ミュージアム事務局
甲府市塩部4-7-14 浅川 保
Tel&Fax 055-253-2735

asakawatamotu@infoseek.jp

アティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」 (略称WAM)：東京・新宿区

この春は、昨年12月から開催中の「東ティモール 戦争を生きぬいた女たち～日本軍とインドネシア支配の下で」展の連続セミナーや、「東ティモールへ『女たちの歴史パネル』を贈ろう」キャンペーンをおこないながら、次の特別展の準備に邁進しなければならない時期です。ところが今年は年明けから「慰安婦」問題をめぐる国内外の動きが目まぐるしく、この対応に追われる日々が続いています。

1月29日には、2000年の女性国際戦犯法廷をめぐるNHK改竄番組裁判の控訴審で、WAMの中核メンバーの多くが加わっている原告・VAWI-NETジャパンが勝訴しました。NHKが政治家の意向を「忖度」して番組改変をおこなったことの責任を厳しく問う判決でした。しかしマスコミはこの問題に及び腰で、認識不足のところも目立ちました。それもあって6月2日からは、「中学生のための『慰安婦』展。子どもにも大人にも役に立つ『慰安婦』問題の基本を、Q&A方式でわかりやすく伝える展示を考えています。

一方、アメリカの下院に提出された「慰安婦」問題で日本政府に謝罪を求める決議案が大きな波紋を呼び、中国や韓国政府も動き出して、カナダ下院でも決議が採択されるという事態になりました。WAMへはメディアや国内外の関係者からの問い合わせや訪問が相次ぎ、てんてこ舞い状態です。これは日本が「外圧」でしか動かないという情けない現状を突きつけるものですが、私たちは「嬉しい悲鳴」をあげています。戦時下での女性への

性暴力問題は、日本軍が支配したアジア諸国の問題に限らず、世界中の紛争地で今も進行している深刻な女性への人権侵害問題です。それをタブー視して、教育現場やマスメディアが避けてきた日本の政治・社会状況が異常だったのです。状況は好転するでしょうか。

WAMは2005年8月の開館以来、「女性国際戦犯法廷のすべて」展、「松井やより 全仕事」展、「置き去りにされた朝鮮人『慰安婦』」展を開いて、現在の東ティモール展に至っています。毎回、パネルの作成とイベントの企画には苦勞していますが、嬉しいことにWAMの支援者・協力者は少しずつ増えています。この5月にはカトリックの国際的な平和運動を展開してきたボックス・クリスティから、WAMに2007年の平和賞が授与されることになりました。ささやかな私たちのアティブ・ミュージアム運動を、ちゃんと見ていてくれる人たちがいるのだ…と皆で大喜びしています。受賞記念のシンポジウムも開催する予定です。

Tel:03-3202-4633 Fax:03-3202-4634

<http://wam-peace.org>

.....

出版物

- ・ 「証言 未来への記憶 アジア『慰安婦』証言集I～南・北・在日コリア編(上)」アティブ・ミュージアム「女達の戦争と平和資料館」編/明石書店/2006年/3000円
- ・ 特別展カタログ「松井やより 全仕事」WAM編・発行/2006年/1500円
- ・ 特別展カタログ「置き去りにされた朝鮮人『慰安婦』」WAM編・発行/2006年/1500円

NPO法人岡まさはる記念長崎平和資料館

12年度定期総会(2006年11月23日)前後からの主な取組や出来事を紹介します。

11月21日、長崎朝鮮人被爆者協議会会長の朴玫奎(パク・ミンギョ)さんが亡くなりました。長年修学旅行生に反核・平和と朝日友好の必要性を説いてこられた氏は朝鮮人被爆者の最後の語り部でしたし、当資料館にとっても設立以来多大な貢献をしてくださったかけがえのない方でした。ご逝去の衝撃から3ヶ月余の本年3月13日から1週間、「朴玫奎さんを偲ぶ特別展」を催し、同胞をはじめ多くの見学者が氏の功績を称えました。思えば氏の一生は反差別の闘いでもありました。1周忌のころに追悼文集を発行することにしています。

12月9日、第7回「南京大虐殺生存者証言集会」を行ないました。今回は虐殺の目撃証言ではなく、「16歳のとき南京の上海路にあった難民区で、押し入ってきた日本兵に母親の目の前で強姦された」体験の証言を聞きました。勇気を奮って証言してくださったAさん（84歳）に、会場からも寄せられた感想文にも感謝とともに真実を知り伝えることの大切さが多く述べられました。歴史を捻じ曲げようとする日本の風潮をさえぎりたい一念で証言を思い立たれたAさんは、会場では名前を明らかにされました。

2月6日、韓国から「平和紀行団」49名が長崎を訪れ、当資料館をも訪問されました。団員は14歳から78歳と幅広く、韓国における平和活動の広さと深さを感じました。また、「民族和合運動聯合」理事長の朱宗桓氏から「日本の侵略反省記念館建立を促す国際連帯」結成への呼びかけを受け、歴史の隠蔽と歪曲に腐心している日本政府の現状に内外の声を結集して反省を迫る必要性を痛感しました。道は遠くとも、アジア共通のその目標に当資料館も連帯していきたいと考えています。

3月27日、長崎の中国人強制連行裁判の一審判決が長崎地方裁判所でありました。「時効10年」で加害企業（三菱マテリアル）の安全配慮義務は「消滅した」とする不当判決でした。当資料館は原告代表団の招聘役を努めてきましたが、来日された高齢の原告代表や原爆遺族の原告と悲憤を共にしました。そ知らぬふりをしていた加害者の10年を問わず、幾多の障害を乗り越えて提訴した被害者を時間で切り捨てる司法こそ不公平といわなければなりません。控訴審を全力で支援する所存です。（文責・理事長高實）

伊藤一長・長崎市長に対する銃撃テロに関する 館長声明 立命館大学国際平和ミュージアム 館長 安齋育郎

2007年4月17日午後7時52分、伊藤一長・長崎市長が暴力団員の手によって銃撃され、翌18日午前2時28分、不帰の客となった。私は、世界に平和を発信する活動に邁進していた伊藤市長に加えられた理不尽なテロリズムを、満身の怒りを込めて糾弾する。

顧みれば、伊藤市長の前任者であった本島等市長も、天皇の戦争責任に関する発言に関わって銃撃テロを経験している。平和を発信する拠点の町として国際的に知られる長崎市の市長が、2代に

わたってテロリズムの犠牲となった事態はまことに憂うべきものであり、われわれはこうした卑劣な暴力に屈することなく「非核・平和」の理念を引き続き追求するとともに、今次テロ事件の真相を徹底的に究明し、このような暴力を根絶するための毅然たる施策が講じられることを求めるものである。

伊藤市長は、1995年の市長就任後、長崎市長が非核・平和の価値の発信者としてもつ特別の責務を深く自覚し、国内外の多様な機会に、政党政派を超えた立場から力強く核兵器廃絶を訴え続けてきた。とりわけ、1995年11月、ハーグの国際司法裁判所で涙声を振り絞って行なった証言は、市長が掲げた「原爆の劫火で焼かれた少年の黒焦げ写真」ともども、法廷内の判事はもとより、世界中の多くの人々に大きな感動と衝撃を与えた。伊藤市長は、「この子供たちに何の罪があるのでしょうか、この子たちが銃を持って敵に立ち向かったとでもいうのでしょうか」と問いかけ、「すべての核保有国の指導者は、この写真を見るべきであります。核兵器のもたらす現実を直視すべきであります。そしてあの日、この子らの目の前で起きたことを知って欲しいのです」と訴えかけた。「核兵器の違法性」を指摘することに難色を示していた日本政府の立場に迎合することなく、被爆地・長崎の切実な思いを地方自治体の首長として率直に訴えかけた証言は多くの被爆者たちに支持され、国際司法裁判所が「核兵器による威嚇やその使用は一般的に国際法違反」とする勧告的意見を発する環境を切り拓くことに貢献したと言えよう。

伊藤市長は、「平和市長会議」の副会長を12年間に渡って務め、広島市長の秋葉忠利会長ともども、国家の枠組みにとらわれない自治体独自の視角から、世界に向けて非核・平和の重要性をアピールしてきた。今次訃報に接し、秋葉市長は、「2000年にニューヨークで開催されたNPT再検討会議では、（伊藤市長が）平和市長会議を代表して国連本部で演説を行うなど、各国政府代表者に核廃絶の必要性を強く要請いただいた結果、『核兵器の全面的廃棄に対する核保有国の明確な約束』が採択されるという画期的な成果を導き出すこと」に貢献したことに言及し、「道半ばで、凶弾に倒れられた伊藤市長のお気持ちを察すると痛恨の極み」であると述べ、「今後は、その御遺志をしっかりと引き継ぎ、平和市長会議の1,608の加盟都市とともに、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現を目指して」いく決意を表明している。私もまた、個人として、また、さまざまなNGOの活動を通じて、非核・平和

の価値の発信のために一層の努力を傾注する覚悟であること表明する。

私は、伊藤市長の下で1996年4月に開設された「長崎原爆資料館」の総合監修作業を担当するとともに、長崎市が事務局を務める「日本非核宣言自治体協議会」の職員研修に講師として協力し、市主催の「核兵器廃絶—地球市民集会ナガサキ」にもパネリストとして参加するなど、個人のレベルでも可能な協力を心がけてきた。また、私が館長を務める立命館大学国際平和ミュージアムとしても、日本平和博物館会議や国際平和博物館会議を通じての協力や、長崎市の青少年ピースボランティア派遣事業への協力など、長崎市の平和事業に関心を寄せ、共同関係の発展の可能性に意を用いてきた。こうした矢先、非核・平和の活動で実績を蓄積しつつあった伊藤市政との連携が、平和の対極にある暴力によって閉ざされたことは痛恨の極みと言うほかはない。私は、伊藤市長が追求された核兵器のない平和な社会をめざして、個人として、また、国際平和ミュージアムとして、弛みない努力を続ける決意であることを表明する。

以上

2007年4月19日

事務局長就任あいさつと幡多ゼミ報告

平和資料館「草の家：日渡あゆみ

事務局長見習い中の〔すうざん〕こと日渡あゆみです。草の家のみなさんに助けてもらいながらのスタートで、あらためて人のつながりの大切さを思う今日この頃。この3月からは正式に事務局長に就任します。未熟ではありますが、一生懸命取り組みますのでどうぞよろしくお願ひします。

さて、私は現在高知大学の4年生。卒業式を目前に友人にこんな相談をされた。「日の丸・君が代の時に立ってたくはないけど、ひとりだけ座って白い目で見られるのも抵抗がある。」とのこと。私も高校生までは何も考えることなく式典などに参加していたが、4年ぶりの式典となりいざ考えてみると、「うちも立ちたくないから一緒に座ってればいいよ。」と答えていた。この4年間で草の家と金英丸さんを通してたくさんの友人や物事との出会いを重ねた自分の中に、以前とは違う価値観が育ち始めている。友人である彼女の言葉を聞くと、決して特別に監視する人が一大学の卒業式に在るわけではないのに、自然と私達の間には監視しあう社会ができていんだなと実感せざるを得な

い。誰かが唱える価値観をさも自分のものであるかのように思い込み動いてしまうこと、個性を大切にしようといいながら少数派に対する多数派というだけでの圧力をかけてしまうことは全ての人を同じように大切にすることからは遠くかけ離れていると思うのに…。だがなかなか気づきにくいようで、意識的に政治と個人が結びつかない友人たちと私達の平和活動の間にはまだまだ埋めることのできない距離がある。日々試行錯誤しながらあきらめずに、「無知であることに対する無知」と戦わないと！！

新年を迎えながらも大学4年生のため卒業論文に四苦八苦していた1月の上旬、四万十にある幡多ゼミナールで韓国の高校生との交流会があった。卒業も心配だけれども「一期一会が大切！！こんなチャンスは明日にはもうない。」と思い、論文も片隅に参加。韓国の高校生約15人と引率の教員5名との交流をした。雨とみぞれの降る中、四万十町にある津賀ダム建設時に強制連行されてきた朝鮮の労働者や日本の労働者がどういった生活を送っていたかなどの説明を受け、実際にその場所に立ってみる。そして朝鮮人労働者の遺骨が埋められた場所で慰霊を。たった数十年前には、いま目の前にいる朝鮮の仲間と私達日本人の間に「優劣」という勝手につくりあげられた間違ったものさしがあって、ひどい扱いをしていたのだと思うと全身に鳥肌がたってしまい、なんとも言えないやるせなさで谷底にある労働者が運んだという石の山を見ていた。いま私たちは、一緒にサッカーやキャッチボールをして遊び、一緒にお風呂に入り抱き合うことができる。なんて幸せなことだろう。あたり前のことでもそう感じてしまうのは過去の歴史を生きた人々に目を向けてこそ。この機会を通して仲良くなった韓国の友達は私たちに向かって「ファミリー」「ベスト」と言ってたくさんハグをしてくれた。「一度会ったら友達で、毎日会ったら兄弟だ♪」なんて歌があったが、やはり人種や国籍を超えても、たった1日の出会いであっても、同じ人間である限り心の距離は越えられるようだ。本当に幸せな出会いである。こういった出会いが少しでも多くなれば「人権と平和」への意識も高まるのではないだろうか。またファミリーのみんなとキャッチボールをしたいなあ。

ちょうどここで書き終えようとしているところへドキュメンタリー映画監督、中井信介さんからメールがきた。角川学芸出版のWebマガジンにおいて政治評論家の姜尚中さんとの対談をしたとのこと。中井さんは米軍基地問題に関する映画を撮

っており、昨年1月から韓国の平沢の米軍基地拡張問題に反対する農民を追ったドキュメンタリー映画を作成している。年末には愛媛と高知を訪れ、私たちと一緒に話げできた。基地拡張闘争をしている、ある70才のおじいさんは「他の土地に行って、農業もできずにご飯だけ食べて、空を見あげて暮らすなんて、生きていと思えない。」と言うそうだ。そのおじいさんが16才の時には、同じく米軍による強制収容があり、何としてもふるさとを離れまいと穴を掘った土の中で暮らしていた。「基本を守らなくてはいけない、中心を失ってはいけない。自分たちは土地を売った覚えもないのに、強制的に土地を奪われる、これは人間としての基本を失っている。盧武鉉大統領にも故郷があるはずだろう、この痛みがわからないのか。」と怒るおじいさんにとっての中心は、ただ自分が望む土地を耕して農民として暮らすこと。人を殺す戦争よりも人を生かす農業を！！と声をあげる農民の声がどれほど尊いものか。けれど住民の立ち退きが決まったのは新年を迎えてすぐのこと。1月に私が出会った朝鮮楽器チャンゴの先生もまさに平沢の住民闘争の最前線にいた方で、名ばかりの民主主義の中で市民の人権がどれほど軽視されているかを物語ってくれた。けれども住民闘争は形を変えて続いている。だからかもしれない。最近の私がチャンゴに魅力を感じるのは、農民の農民として生きることに対する力強さをチャンゴの音に感じるから。実際にそのチャンゴの先生の音色は力強くあたたかく、そして少し寂しげな音がする。対談の記事を読みながら涙がとまらなかった。悔しさもあるけれど、たたかう勇気ももらった気がする。

毎日の『色々』の中で

平和資料館 草の家事務局長 日渡あゆみ

あっという間に3ヶ月が経とうとしています。私がこの平和資料館で仕事をしだしてからは以前にもまして、毎日がめまぐるしくたくさんの『色々』であふれているように思います。

2月に見習いをスタートしてからというもの、本当に出会いに恵まれてきました。韓国のかわうその研究者とかわうその住める街づくりを推進する地方公務員の方々と須崎・葉山村への訪問にはじまり、関西で活動している地域振興NPOの方との出会いや朝鮮の伝統楽器を演奏しているグループとの交流、伊藤真さんとの出会い。一番最近ではメキシコで学生をしている友人ができました。

みんなそれぞれに自分の毎日を大切に生きていて、ちゃんと「ひとり」として私という「ひとり」に向かい合ってくれます。当たり前のことかもしれませんが、実はこの当たり前に思うことが一番大事だけど一番難しいのかもしれない。けれど多くの人がそうしてくれました。

出会うのはもちろん人ばかりではなくて、人に出会うことで様々な物事や考え方にも出会います。かわうその研究者の方達に会わなかったら、川を前にして人間とかわうそという2者を同じフィールドで考えることはなかったでしょうし、楽器のグループからは音楽で人の心を開くというのを感じて、興奮したりもしました。伊藤真さんには理想だとか現実だとかで夢みることをダメだって言うような人達に出会ってきた私が「理想があつて何が悪い！！」と思えるくらい勇気をもらったように思います。メキシコの友達からはスペイン語のあいさつを教えてもらったり日本語を教わったりするうちに、相手のことを知ろうとする気持ちや自分のことを知ってもらいたいという気持ちの混ざるあたたかい時間に出会わせてもらいました。

私の毎日の中に溢れている「色々」にはあざやかなものもあれば、もちろんねじまがって透明度のない「色々」もたくさんあります。性奴隷問題に対する否定的な発言の上で六カ国協議での拉致問題のみを論点とする日本政府の外交に対する怒りや恥ずかしさ、東洋町の核廃棄物処理場問題に関する民主主義とはどうい言えない横暴っぷり。国民投票法案の衆議院による強行採決もそう、未だに戦火のあるイラクとその戦争に使われている私たちの税金。それなのに何だか自発的になっていない自分へのやるせなさや憤りと呆れ。

毎日が物理的にひどく忙しいわけでもないのに、心の中はとても忙しく、そうであることに後から気付きます。自分でもよくわからない感情がひとりで歩きだして行ってあとで自分の通った足跡を見ているかのようです。ひどく自分を揺さぶられているのだと思います。自分にもっと向き合おうとしているということは、同じように周りにももっと向き合おうとしているのでしょう。鏡をみるかのように自分の中とこれから出会うたくさんの「色々」を見つめて、塗り重ねていながら、もっと今を大切に生きるにはどうすればいいかを考えたいと思います。

平和・トンボ資料館：東京・豊島区

東京の池袋駅に近いところに平和・トンボ資料

館があります。白石浩次郎さんが18年前に開設。日本で記録された約210種のうち約200種がそろっています。開館日は月二回だけ。入場無料。壁に「戦争は最大の自然破壊」の言葉があります。「トンポを通じて、自然や命の大切さを感じてもらいたいですね。何よりすべての生き物にとって平和はなくてはならないもの。それを伝えていきたいと思っています。」

『赤旗』(2月25日)の記事より

国内ネットワークのニュース

太平洋戦史館：岩手

11月3日岩淵宣輝会長は、第9回岩手日報文化賞を受賞しました。賞状には「あなたは戦後60年を経た今もなお 終わりを告げない戦没者の遺骨帰還に心血を注いでおられます。私費で太平洋戦史館を設立し高級平和を願う姿は県民に感銘の輪を広げています」と書かれていました。

戦争が終わって60年以上も経つというのに、未だ百万人以上の日本兵が故郷に帰れないでいる。野ざらしのまま放置されている。野ざらしのまま放置されている。それがこの国では「社会問題にならない!!」社会問題にならないことこそが現代日本が抱えている「第社会問題」なのだと思います。

『戦史館だより』No. 58より

Tel: 0197-52-3000 Fax: 0197-52-4574

福島市公会堂：福島県福島市

杉原千畝の姿を描くドキュメンタリー演劇「センポ・スギハアラ」2007年8月30日 日本人外交官杉原千畝の姿を描いた、劇団銅鑼(どら)によるドキュメンタリー演劇「センポ・スギハアラ」が、センポスギハアラ上演実行委員会、NPO法人アウシュビッツ平和博物館主催により8月30日に福島市公会堂で上演されます。同作品は第二次世界大戦中、ナチス・ドイツの迫害から逃れるユダヤ人に、外務省の訓令に背き日本通過ビザを発給。これにより、6000人に上るユダヤ人の命を救ったという実話をもとに描いている。タイトルの「センポ」は、外国人には千畝(ちうね)の発音が難しいため「センポ」と呼ばれていたことを表している。同作品はこれまで、日本を始め中国やリトアニアなど世界各国で上演され、その回数は800回を超えている。同博物館の小淵真

理館長と学芸部の我妻英司さんは「杉原さんは加害者でも傍観者でもなく、救済者となった人。今のいじめ問題などの視点からも考えさせられる作品」と話し、公演をPRしている。

問い合わせ

アウシュビッツ平和博物館

〒961-0835

福島県白河市白坂三輪台245

Tel: 0248-28-2108

URL: <http://www.am-j.or.jp/index2.htm>

松代大本営の保存をすすめる会：長野

北原高子

「皆神山地下壕詳細調査」の取り組み

松代大本営地下壕群の一つに「皆神山地下壕」(みなかみやま)があります。アジア太平洋戦争末期、敗色濃厚となった日本が、本土決戦と国体護持のために企てた大本営移転計画で松代周辺には十数箇所に関連施設(ほとんどが地下壕)が構築されましたが、松代が移転先として選ばれた理由の一つに「信州」(長野県)は「神州」に通じ、現人神である天皇の動座に相応しいというのがあります。そして「皆神山」は「神」の名を持つ縁起のよい名の山として当初は皇族の居住地にと考えられたようです。しかしここは崩落の激しい大変危険な地下壕で普段はだれも入壕できません。

当会では5年前からこの地下壕の測量・遺構・壕内の地質の調査、遺物の収拾、周辺の聞き取り調査などを重ね、昨年その報告書を完成することができました。調査は戦争遺跡保存全国ネットワーク代表の十菱駿武さん(山梨学院大学教授)はじめ、戦跡考古学の先駆者菊池実さん、大学生の皆さんなど多くの方の力添えを得て実施しました。昨年行われた「保存運動20周年・祈念館建設運動10周年のつどい」ではこの調査結果を中心に「戦争遺跡保存の意義と課題」と題して十菱さんの講演、菊池さんの報告をお聞きして学習しました。火山の山の裾野に地下壕を掘るなど、専門家の視点では考えられないようなことが行われており、当時の狂気の沙汰が忍ばれるなど、調査結果は歴史を紐解く鍵になりました。松代大本営地下壕群の文化財指定を目指す上で皆神山の詳細調査は必至でしたし、戦争遺跡がどんどん風化し、危険な地下壕では事故も起き、閉鎖を求められている地下壕も少なくない中、貴重な戦争遺跡を安

易に埋め立てたり封鎖するのではなく、保存の方法を探り、少なくとも調査記録を残すために、一保存団体ではなかなか難しいことも戦跡ネットの力を借りて実現できるという一つの試みでもあったと思います。昨年から開催している「松代大本営平和祈念展」では「特別展示」として皆神山地下壕の遺物、写真、図表、ダイナマイトの保管箱などを展示して地域の方に見ていただきました。関連の展示・学習交流の場としての平和祈念館の実現に、NPO法人松代大本営平和祈念館とともに努力しているところです。同時に一日も早く文化財としての指定が叶うよう、県や市にいっそう強くはたらきかけていこうと、今年の定期総会では特別アピールの採択をしました。

安曇野ちひろ美術館：長野県北安曇郡

開館 10 周年記念展 IV ちひろとケーテ・コルヴィッツ 戦争と平和を描いた二人の女性画家
2007 年 9 月 14 日 (金)～2007 年 11 月 30 日 (金)
平和を願い描き続けたちひろと、透徹した目で社会の悲しみを捉えモノクロームの版画に刻んだケーテ・コルヴィッツ。本展では、共に一人の母として戦争と平和を独自の表現で描いた、ちひろの『戦火のなかの子どもたち』やコルヴィッツの「犠牲」等を紹介します。

開館時間: 午前 9 時～午後 5 時 (8 月は午後 6 時まで)

休館日: 第 2、4 水曜日 (祝日は開館、翌日休館、8 月は無休、7/12(木)、9/13(木)は臨時休館)

問い合わせ

安曇野ちひろ美術館

〒399-8501 長野県北安曇郡松川村西原

Tel: 0261-62-0772 / テレフォンガイド
0261-62-0777

Fax: 0261-62-0774

URL: <http://www.chihiro.jp/azumino/schedule.html>

埼玉県平和資料館：東松山市

テーマ展IV「雑誌・新聞附録にみる時代の世相」が企画展示室で 2007 年 2 月 17 日～4 月 8 日の会期により開催されました。

テーマ展 I 「戦後日本の国際平和貢献—日本の国際緊急援助隊の活動と新収集資料展」が企画展示室で 2007 年 4 月 28 日～6 月 24 日の会期により開催されています。

平和文化展・絵画 (小中学生) の公募作品の展示会が、2006 年 12 月 16 日～2007 年 1 月 28 日の

会期により開催されました。

2006 年度第 2 回平和朗読会が 2006 年 11 月 25 日に開かれ、入間市朗読ボランティアグループ「はづき」が出演しました。

2006 年度第 2 回戦争体験者との交流会が 2006 年 11 月 11 日に開催され、小暮吉子さんが従軍看護婦の経験を話しました。

特別映画会が開催され、2006 年 11 月 18 日には「ホテル」が、2007 年 3 月 17 日には「黒い雨」がそれぞれ上映されました。

Tel: 0493-35-4111 Fax: 0493-35-4112

<http://homepage3.nifty.com/saitamapeacemuseum/>

丸木美術館：埼玉・東松山市

2006 年度第 3 回企画展「旅を描く 丸木位里・丸木俊作品展」が 2006 年 10 月 28 日～2007 年 1 月 13 日の会期で開催されました。丸木俊は戦前にモスクワへ 2 度行き家庭教師生活をし、当時日本の統治下にあった南洋群島ミクロネシアへ 1 度渡り、丸木位里も日本国内のさまざまな土地を歩きました。戦後は《原爆の図》巡回展のために日本全国を巡り、国外では中国、モンゴル、デンマーク、オランダ、ロシア、アメリカ、フランスなど数多くの国を訪れています。また、水俣やアウシュビッツ、沖縄などを共同制作のテーマに取り上げるたびにそれぞれの地取材し、その他にもスペイン、イタリア、チェコ、ブルガリア、インド、中国西域などを旅しています。この企画展は、それらの旅に焦点を当てながら、これまで展示される機会の少なかった 2 人の個人作品を中心に紹介したものです。

公開トーク「1970 年原爆の図アメリカ巡回展を振り返る」が、2006 年 11 月 12 日に開かれ、近現代史研究者の小沢節子さんが聞き手となって、この巡回展に準備段階から関わった袖井林二郎さんが語りました。

2006 年度第 4 回企画展「廃品復活展」が 2007 年 1 月 21 日～3 月 31 日の会期で開催されました。これは万年山えつ子さんが企画したもので、身のまわりで使わなくなったモノを集めて、アートの方で甦らせるというものです。

芸術出版社主催による「平和ファンダメンタル祈念展」が 2007 年 4 月 5 日～18 日の会期で開催されました。

丸木美術館開館 40 周年企画「丸木俊展 女子美術時代から《原爆の図》まで」が 2007 年 4 月 24

日～6月30日の会期で開催されています。丸木俊)は上京して女子美術専門学校に油絵を学び、画家としての道を歩みはじめます。今回の企画展は、モスクワと南洋という2つの異国体験のなかで生まれた作品を軸にしなが、夫・位里との共同制作によって描いた《原爆の図》にいたるまでの、彼女の歩んだ道りに焦点を当てて紹介するものです。自らの画風を模索する時期に制作された油彩画や水彩画、鉛筆スケッチ、人体デッサンなど、さまざまな作品からは、「女絵かき」の視線が浮かび上がります。

神奈川県立近代美術館企画課長の水沢勉さんと小沢節子さんによる、40周年記念対談「《原爆の図》—『過去』の未来を考える」が、2007年5月5日の丸木美術館開館記念日に開かれる予定です。これは、《原爆の図》を常設展示するために開館した丸木美術館が40年の歳月を経た今日、《原爆の図》の持つ意味や《原爆の図》の歴史を読み解きながら、保存展示し未来へとそれを託す美術館などの未来を考えるものです。

Tel:0493-22-3266 Fax:0493-24-8371

<http://www.aya.or.jp/~marukimsn/top/kikaku.htm>

成田羊羹資料館：千葉・成田市

なごみの米屋が建てた成田羊羹資料館は、第7回企画展「戦地慰問と軍事郵便物語」を2006年10月～2007年4月30日の会期で開催しました。米屋羊羹の創業者、諸岡長蔵は1935年ごろから地元出身の兵士たちに、米屋羊羹や成田山のお守りを慰問品として送りました。兵士たちから来たお礼状が多数残されています。企画展では、慰問品、慰問趣意文、慰問用羊羹のポスター、お礼状などが展示されました。お礼状には戦場の様子が読み取れるものもありました。国立歴史民俗博物館の特別企画「佐倉連隊にみる戦争の時代」の解説パネルも展示していました。

Tel:0476-22-2266

<http://www.nagomi-yoneya.co.jp/shiryu.htm>

わだつみのこえ記念館が開館：東京・文京区

2006年12月1日、文京区本郷5-29-13の喜福寺境内にある「赤門アビタシオン」の中に「わだつみのこえ記念館」が開設されました。1947年12月4日に東京大学学生自治会内の戦没学生手記編集委員会編で『はるかなる山河に』が刊行さ

れましたが、これは東京大学の戦没学生の手記を収録したものです。1948年春に日本戦没学生手記編集委員会が結成され、東京大学だけではなく、全国の戦没学生の手記を募集し、1949年10月20日に日本戦没学生の手記や書簡などの手記を収録した『きけわだつみのこえ』が発行されました。1950年4月22日には、日本戦没学生記念会(通称、わだつみ会)が結成されましたが、その事業の中に記念館の建設も課題にしていました。1958年にわだつみ会は解散しますが、1959年に再建第2次わだつみ会として再発足しています。わだつみ会は1963年2月1日に『戦没学生の遺書にみる十五年戦争』刊行しますが、これは1966年12月8日に『第2集 きけわだつみのこえ』と改題をして発行されます。その後『きけわだつみのこえ』と『第2集 きけわだつみのこえ』は岩波文庫になり、いずれも増補された新版が出ています。

わだつみ会は、学徒出陣50年にあたる1993年に「わだつみ記念館」の開設を呼びかけ、募金活動をはじめました。記念館開設の準備としての意味も込めて、2001年11月～12月にかけて、大阪の朝日新聞大阪本社アサコムホールと京都の立命館大学国際平和ミュージアムで「平和の世紀へ遺書・遺品展—戦没青年とともに生きる」を開催し、ついで2002年8月に東京の江戸東京博物館で「平和への遺書・遺品展—戦没青年との対話」を開催しています。

これらの成果を踏まえて、常設の「わだつみのこえ記念館」が開設されたわけです。わだつみ会は任意団体であるため、2005年に1月に「特定非営利活動法人 わだつみ記念館基金」を設立し、同年8月に法人登記をしています。記念館はマンションの1・2階が階段でつながった部屋で、合わせて約100㎡の広さで、2階が展示室になっています。

展示は戦没学徒の日記・ノート・手帳・書簡・葉書などの遺品が中心で、あわせて朝鮮人戦没学徒の関連資料やわだつみ会の歴史資料なども展示しています。遺品が展示されている戦没学徒は『きけわだつみのこえ』『第2集 きけわだつみのこえ』に手記が掲載されている方が多く、1集・2集両方に収録されている方が2人、1集のみの方が11人、2集のみの方が5人となっています。『はるかなる山河に』のみに収録されている人は1人で、いずれにも掲載されていない人も4人展示しています。また、遺影だけの人も25人おり、展示されている方は合計48人となっています。

遺品は原則として現物を展示していますが、例外として『新版 きけわだつみのこえ』の一番最初と最後に載っている上原良司と木村久夫だけは複写資料を展示しています。展示は時代ごとに分けて展示しています。日中戦争期に軍隊に入った人は、篠崎二郎・田村正の2人です。繰り上げ卒業を含めて、太平洋戦争期に軍隊に入った人は、柳田陽一・浅見有一・奥村克郎・北川智・井上淳・石岡俊蔵・宇田川達・中村勇・上村元太・宅島徳光の10人です。学徒出陣として軍隊に入った人は、吉村友男・佐々木八郎・松岡欣平・鷺尾克己・山隅観・山根明・原亮・林尹夫・上原良司の9人です。このうち林尹夫は開館当初だけ立命館大学国際平和ミュージアムから借用して展示しているものです。戦後に亡くなった人は関口清・木村久夫の2人です。

遺稿には、戦争や当時の政策への批判や自由主義思想が読み取れるものもあり、また家族への愛情が込められたものもあります。現物の遺稿をじっくり読んでいかれる来館者も多く、感想を書いていかれる方の比率も多くなっています。

開館は月・水・金の午後1時半～4時で、休館日は祝日などの休日、年末年始、8月後半などです。入館料は無料ですが、募金は感謝して受け取っています。

Tel&Fax:03-3815-8571

<http://wadatsuminokoe.lookscool.com/>

都立第五福竜丸展示館：江東区

第五福竜丸展示館では、特別展「船大工の技と仕事」を開催します。ビキニ水爆実験に被爆した木造船第五福竜丸は、今春建造60年を迎えました。還暦です。第二次世界大戦後の食糧難の時代に造られた木造船（当時は木の船しか造れなかった）で現存するただひとつの船です。

こうした大型の木造船は、いまでは造られることはありません。船大工さんたちも高齢化し、その技術は受け継がれなくなっています。

第五福竜丸は、20年前に大補修、木造船の建造方法を用いて復元されています。今回の展示は、この船を題材に、建造の技、船大工の仕事、道具、船体模型、そして船内の映像展示もおこないます。原水爆問題とは別の角度から木造船福竜丸を眺め、核も戦争もない未来への航海をさらにたくさんの人々とすすめたいと願っています。

会期 4月1日～9月2日 入館無料、記念イベント 7月16日船大工と文化財

保存の専門家によるギャラリートーク、船の絵を公募（中学生まで）～7月10日、作品展示7月22日～8月31日。問い合わせ 03-3521-8494 第五福竜丸平和協会まで

第五福竜丸展示館より、新しい本の出版 『フィールドワーク 第五福竜丸展示館』 川崎昭一郎監修 第五福竜丸平和協会編

このたび当館学芸員が執筆したガイドブックが平和文化から出版されました。第五福竜丸展示館を案内しながら、ビキニ事件と第五福竜丸の被災、マーシャルの核被害などについてわかりやすく解説します。

修学旅行やフィールドワークの事前・事後学習にも使え、手に持って展示館を訪れてほしいとの願いをこめて編集したブックレットです。日々来館者に接し、ガイドにあたっているボランティアの会の「こんな本がほしい」の声を集め、当館学芸員が執筆にあたりました。

元乗組員の大石さんの証言、展示館の資料や来館者の声も紹介。ビキニ事件の事実と影響、現在の核問題まで網羅し、「学び・調べ・考えよう」、そして自分の言葉で伝えよう、とよびかけています。ご活用ご紹介いただければ幸いです。

A5判64ページ、写真多数、販価630円(税込み)、展示館からは送料とも700円でお送りします。5冊以上は送料無料。

東京大空襲・戦災資料センター：東京・江東区

政治経済研究所と東京大空襲・戦災資料センターの増築が2007年1月15日に完成し、3月1日に展示がリニューアル・オープンしました。3階の資料保管室が3室になり、広さも約5割増しになりました。2階の会議室・説明室も倍の広さになりました。

3階の既存の部屋は、15年戦争の歴史や防空も入れましたが、ほぼ東京大空襲にテーマをしぼりました。空襲関係の資料を増やすとともに、資料と体験記などとの連携をつけて、資料提供者の情報も可能な限り出すようにしました。資料を見やすく、読みやすくなるようにするとともに、説明も系統的になるように書きかえました。2畳と狭いですが、灯火管制下の部屋の復元も作りました。また日本人だけでなく、朝鮮人の被害も取り上げるようにしました。

新しくできた特別保管室では、東京空襲を記録する会の歴史や補償要求運動の歴史とともに、平

和へのメッセージを伝える資料も紹介しています。もう1つの新しい保管室では、戦争と子どもたちのテーマを小コーナーから拡充し、戦時教育・学童疎開・戦後の教育の民主化などを取り上げています。

2階の壁面には、小野沢さんいちさんや小島義一さんらによる東京大空襲を描いた絵画を増やすとともに、東京大空襲の被災地図を、アメリカ軍の損害報告書や旧軍資料を使って、空襲目標や軍需工場の情報も盛り込んで作成し、掛けています。東京以外の空襲の写真なども3階から、2階へ移し、日本の空襲地図も作成しました。また、5月までですが、東京・京都・広島の3か所の「世界の子どもの平和像」のエスキースを置いています。

リニューアル・オープンの特展として、『東京大空襲・戦災誌』の原稿展をおこないました。これは3月10日の大空襲について書いた、約320人の体験記の原稿を展示するもので、その執筆者と家族に案内を出しましたが、約180通が戻ってくる状態で、実際に15家族ほどが見に訪れました。

戦争災害研究室の第6回研究会は、2006年12月16日に東京大空襲・戦災資料センターで開催され、山辺昌彦さんが「平和博物館・歴史博物館などにおける、15年戦争関係の最近の取組について」と題して報告しました。この報告は、政治経済研究所の2006年度個別研究「2006年における博物館の戦争展示」の成果で、論文化され、『歴史評論』2007年3月号に『平和のための博物館』の今」として掲載されました。

第7回研究会は、2007年1月9日に政治経済研究所で開催し、植野真澄さんが「戦傷病者戦没者遺族等援護法の制定過程について—立法過程にみる援護理念の創出」と題して報告しました。

第8回研究会は、2007年2月9日に政治経済研究所で開催し、青木哲夫さんが「日本の防空壕政策」と題して報告しました。

第9回研究会は2007年4月14日に政治経済研究所で開催し、江戸東京博物館学芸員の松井かおるさんが『記録—少女たちの勤労動員』の書評をしました。この本の編者3人も参加しました。

『戦争災害研究室だより』が発行され、第6号では第6回研究会の、第7号では第7回研究会の、第8号では第8回研究会、第9号では第9回研究会の報告がそれぞれ掲載されています。

第2回研究会の山本唯人さんの報告は論文化され、政治経済研究所の学術研究雑誌『政経研究』87号(2006年11月刊)に「東京大空襲時の民間救護—東京大空襲・戦災資料センター『民間救護

活動調査』の分析を中心に」として掲載されました。

「東京大空襲を語り継ぐつどい—東京大空襲・戦災資料センター開館5周年」が亀戸駅前のカメリアホールで、2007年3月10日に開催され、井上ひさしさんの講演「日本の空襲」などがありました。

Tel:03-5857-5631 Fax:03-5683-3326

<http://www9.ocn.ne.jp/~sensai/>

しょうけい館 戦傷病者史料館:東京・千代田区

戦傷病者とそのご家族等が戦中・戦後に体験したさまざまな労苦についての証言・歴史的資料・書籍・情報を収集・保存・展示し、後世代の人々にその労苦を知る機会を提供する国立の施設です。2006年3月21日に開館し、財団法人日本傷痍軍人会が厚生労働省から委託を受け、運営にあたっています。

2006年8月8日から20日にかけて、企画上映会「沖縄戦を生きぬいて—4人が語る戦争の傷あと—」を開催しました。

証言映像DVD「戦傷病者の労苦を語り継ぐ」を貸し出しています。利用希望者は、ホームページにある「しょうけい館資料貸出規程・申請書」をご覧ください。

2007年3月に『常設展示図録』を刊行しました。

連絡先:しょうけい館事務局業務課

Tel:03-3234-7821 Fax:03-3234-7826

<http://www.shokeikan.go.jp/>

すみだ郷土文化資料館:東京

企画展「東京空襲を描く人々—空襲体験者の記憶と表現」が3階の企画展示室で2007年2月10日~4月15日の会期で開催されました。これは、東京空襲体験者が描いた絵画について、「完成作品」とも、「デッサン」や「下絵」などを展示するものです。「デッサン」「下絵」には記憶から呼び起こされた空襲体験の印象が直截的に表現されています。また「デッサン」「下絵」と「完成作品」を比較し、体験者の「記憶」が第三者への伝達を目的とした「表現」になるまでの、体験者の「心の軌跡」を推察することもねらいとしています。

Tel:03-5619-7034 Fax:03-3625-3431

http://www.city.sumida.lg.jp/sisetu_info/siryou/kyoudobunka/info/kuusyuten/index.html

豊島区立郷土資料館：東京

研究紀要『生活と文化』第16号が、2007年3月1日に刊行され、青木哲夫さんの「無差別空襲開始後の人員疎開の状況と問題点」、伊藤暢直さんの「隣組記録に見る豊島区内隣組の活動状況」などが掲載されています。

Tel:03-3980-2351 Fax:03-3980-5271

<http://www.museum.toshima.tokyo.jp/top.html>

熊谷守一美術館：東京・豊島区

「4月13日の東京大空襲 詩と絵展」が3階のギャラリー桤で、2007年4月6日～15日の会期により開催されました。これは、画家丸野豊の研究者で全国的に丸野豊や空襲の展示会を開催している調海明さんと熊谷守一美術館館主の熊谷榎さんの企画によるもので、丸野豊が描いた巣鴨中学付近の焼け跡のスケッチ、吉井忠が描いた池袋付近の焼け跡のスケッチや油絵、熊谷榎さんの空襲の散文詩、豊島区内の国民学校が受けた戦災の調査結果などが展示されました。

Tel:03-3957-3779 Fax:03-3959-9034

<http://www.kumagaimori.jp/>

衆議院憲政記念館：東京・千代田区

「日本国憲法施行六十周年記念展示」が2007年4月26日～5月20日の会期で開催されています。これは、今年が日本国憲法施行から60年目にあたるのを記念して、戦後、議会において審議され、日本国憲法として公布、施行されるまでの経緯や、新憲法の下で第1回国会が開会されるまでを、館蔵資料を中心に、関係資料や関係人物の書・絵画及び当時の写真などにより紹介するものです。東京大空襲を描いた鶴丸昭彦画「父と娘」、麻生豊画「銀座復興絵巻」、共和制をうたった高野岩三郎の「日本共和国憲法私案要綱草稿」、徳田球一のサインがある『赤旗』再刊第一号、浅沼稻次郎が所蔵していた「日本社会党結党宣言」、新憲法啓発書の『新しい憲法 明るい生活』と『あたらしい憲法のはなし』なども展示されています。リーフレットが刊行されています。

Tel:03-3581-1651 Fax:03-3581-7962

http://www.shugiin.go.jp/itdb_annai.nsf/html/statics/kensei/kensei.htm

国立公文書館：東京・千代田区

春の特別展「再建日本の出発—1947年5月 日本国憲法の施行」が2007年5月3日～22日の会期で開催されています。これは、日本国憲法の施行から満60年にあたることにちなんで開かれるもので、「日本国憲法」の「原本」、議会での修正を書き込んだ「憲法改正案」や、日本国憲法制定の過程と新憲法に伴う諸施策の立案・施行の動き、そして新憲法制定に先立つ改革を物語る公文書などを展示しています。展示図録を刊行しています。

Tel:03-3214-0621

<http://www.archives.go.jp>

ちひろ美術館・東京：東京都練馬区

開館30周年記念展Ⅲ 世界中のこどもみんなに平和としあわせを～2007年7月4日～2007年9月2日 於 (1) ちひろが願ったこと(2) 『ここが家だ - ベン・シャーンの第五福竜丸』展(3) 再現! 「ベトナムの子供を支援する会」反戦野外展 ちひろは子どもの平和と幸せへの願いを、絵筆に託した画家でした。ちひろが反戦の思いを込めた絵本『戦火のなかの子どもたち』の他、昨年出版された『井上ひさしの子どもにつたえる日本国憲法』の原画などを展示し、今、改めてその願いを見つめ直します。また、昨年出版された絵本『ここが家だ - ベン・シャーンの第五福竜丸』(構成・アーサー・ピナード 装丁・和田誠)に収録された作品を含むベン・シャーンの素描約20点とともに、あまり知られていないベン・シャーンの子画像、子ども像を紹介します。さらに、再現! 「ベトナムの子供を支援する会」反戦野外展では、1967年から70年代にかけて活動した「ベトナムの子供を支援する会」の反戦野外展のポスターや、戦争をテーマとした絵本の数々も同時展示します。出品画家：井上洋介、いわさきちひろ、久米宏一、田島征三、多田ヒロシ、長新太、手塚治虫、西村繁男、長谷川知子、和田誠、他 開館時間：午前10時～午後5時(8月10日～20日の開館日は午後6時まで) 休館日：月曜日 但し、7月16日(祝・月)は開館、翌17日(火)休館。 8月13日(日)20日(月)は開館。 7月3日(火)9月4日(火)は展示替えのため臨時休館。

問い合わせ

ちひろ美術館・東京

〒177-0042 東京都練馬区下石神井4-7-2

Tel: 03-3995-0612 / テレフォンガイド 03-3995-0820

Fax: 03-3995-0680

URL:

<http://www.chihi.ro.jp/tokyo/schedule.html>

神奈川県立地球市民かながわプラザ：横浜市

カナガワビエンナーレ国際児童画展は、絵画を通じて明日の世界を担う児童の夢と創造力を育み、多文化共生社会の実現に向けて、お互いの生活、文化を理解し合うため、広く世界各地から児童画を募集して、開かれるものです。国際児童画展は1980年から隔年で開催されていますが、今年も開催されます。今回は、世界85か国の4歳から15歳の子どもたちから2万3889点の応募がありました。大賞3点を含む入賞作品523点が、5月と8月の2回に分けて約350点ずつ展示されます。会期は第1部が2007年5月12日～27日、第2部が2007年8月4日～19日です。

TEL:075-896-2121 Fax:045-896-2299

<http://www.k-i-a.or.jp/plaza/>

日本新聞博物館：神奈川県横浜市

毎日新聞創刊135年記念 MOTTAINAI (もったいない) ～～キャンペーン報道の力 2007年4月29日(日)～2007年6月24日(日)地球温暖化を回避するために、私たちは日常生活で何をすべきなのか。こうしたことを考えるきっかけにしようと企画された展示会。地球温暖化の危機、世界・日本からのレポート、環境保全と平和を追求する MOTTAINAI キャンペーンの一環の展示のほか、「DO MOTTAINAI」と題し、エコラッピング「風呂敷」の結び方教室なども開催されました。

問い合わせ

日本新聞博物館

Tel: 045-661-2040

Fax: 045-661-2029

URL:

<http://www.pressnet.or.jp/newspark/ffloor/schedule.html>

川崎市平和館：神奈川

企画展「貧困と医療問題」が2006年11月16日～26日の会期で、企画展「戦争体験を話す・聞くー終戦直後の混乱期」が2007年2月24日～3月4日、それぞれ開催されました。

企画展「川崎大空襲パネル展」が2007年3月24日～5月6日の会期で開催され、川崎大空襲の被害記録写真が展示され、「戦争体験を聞く、語る」「おれたちのビー玉」のビデオが上映されました。

TEL: 044-433-0171

<http://www.city.kawasaki.jp/25/25heiwa/home/heiwa.htm>

静岡平和資料センター

企画展「風船爆弾と静岡」が2006年10月20日～2007年2月18日の会期で開催されました。静岡でも隣組の主婦や女学生などが風船爆弾の材料の生産に動員されたことも展示しました。

企画展「子どもたちに伝えたい静岡の戦争Ⅱー三菱工場への爆撃」が2007年3月2日～9月23日の会期で開催されています。展示の構成は、静岡の戦争と郷土の部隊、戦時下の暮らしー銃後も戦場、戦争の果てに静岡に空襲が、静岡市街の空襲に先立つ三菱工場への爆撃などです。

報告書『風船爆弾と静岡』が2007年2月20日に刊行されました。これは1994年から続けられた調査をまとめたものです。

Tel:054-247-9641 Fax:054-247-9641

<http://homepage2.nifty.com/shizuoka-heiwa/>

「戦争と平和の資料館ピースあいち」：愛知県 名古屋市

NPO 法人「平和のための戦争メモリアルセンター設立準備会」が建設を進めていた「戦争と平和の資料館ピースあいち」がオープン。1993年に同設立準備会が愛知県と名古屋市に資料館建設を要望、基本構想が策定されたが、財政難などから計画は進まなかった。市民の寄付による建設を決め、2005年、愛西市の加藤たづさんから用地約300平方mと建設資金約1億円が寄付された。展示は同施設準備会のメンバーが構想を練り、資料を収集したもの。広島原子爆弾で被爆した瓦の破片や召集令状、炎上する名古屋城のパネルなど計約200点から愛知県下の空襲や戦争の全体像、戦時下の暮らしを紹介する。(毎日新聞 名古屋版 2007年4月27日)

・開館日・時間：火～土 11:00～16:00

・入場料：大人300円、小中高生100円

・お問い合わせ：ピースあいち 052-962-0136

立命館大学国際平和ミュージアム：京都市

特別展「地球の上に生きる 2006-DAYS JAPAN

フォトジャーナリズム写真展」が2006年10月1日～11月12日の会期により、1階の中野記念ホールで開催されました。10月11日に記念講演会が立命館大学衣笠キャンパス以学館1号ホールで開催され、DAYS JAPAN 編集長の広河隆一さんとDAYS JAPAN フォトジャーナリズム大賞一位入賞者のルハニ・コールさんが講演しました。

ミニ企画展「ミュージアム この1てんーグアムで描かれた絵」が2006年9月27日～10月9日の会期により、ミニ企画展「ベトナム戦争の傷跡」が2006年10月11日～22日の会期により、ミニ企画展「平和ってなに色？／一文字で表す平和へのメッセージ」が2006年10月27日～11月5日の会期により、ミニ企画展「ミュージアム この1てんー愛国百人一首」が2006年11月7日～19日の会期により、ミニ企画展「人と戦いの考古学ー戦争の起源を求めて」が2006年11月22日～12月15日の会期により、ミニ企画展「縄文時代からのメッセージー立命館大学調査宮崎遺跡に見る縄文時代の平和」が2006年12月17日～2007年1月10日の会期により、ミニ企画展「知らなかった京都の戦争 京都への原爆投下計画ーそれはなぜ避けられたか」が2007年1月13日～2月12日の会期により、ミニ企画展「06年度日本新聞協会賞『パキスタン地震』の一連報道写真」が2007年2月15日～3月6日の会期により、ミニ企画展「伊藤家からのメッセージー戦争の20世紀を見つめた遺品」が2007年3月9日～4月26日の会期により、いずれも2階常設展示場の中のミニ企画展示室で開催されました。

「紙屋悦子の青春」映画上映会が2006年12月7日に以学館1号ホールで開催されました。関連して、安齋育郎館長と「京都シネマ」代表の神谷雅子さんとの対談も開かれました。

紀要『立命館平和研究』第8号が、2007年3月13日に発行されました。

Tel: 075-465-8151 Fax: 075-465-7899
<http://www.ritsumei.ac.jp>

京都精華大学ギャラリーフローラ：京都市

所蔵品特別展示 鎮魂・平和・人間 2007年5月10日(木)～6月17日(日) 京都精華大学ギャラリーフローラの所蔵品の中からテーマにそった作品が選ばれ、展示されました。村岡三郎、岡崎和郎、榎忠、塩田千春、嶋田美子、ローリー・トビー・エディソンらの作品が展示されました。

問い合わせ

京都精華大学ギャラリーフローラ
〒606-8588 京都市左京区岩倉木野町137
Tel : 075-702-5230 Fax : 075-705-4076
E-Mail : fleur@kyoto-seika.ac.jp
京都外国語大学：京都市

イマジン・ピースー模擬国連会議～2007年10月26日(金)～2007年10月28日(日) 於京都外国語大学国連サークル・ハビタット・フォー・ヒューマニティ・サークル主催による貧困と平和について考える複数のイベントを二日間にわたり同時開催します。「アクションプランMUN会議」では世界の貧困緩和のために私たちにできることを実際に計画し、会議終了後の一年間で計画を実行します。「ハンガーバンケット」では世界の貧富の差を食事を通して体験してもらい、ディスカッションも行います。「絵画展」は世界中から集めた60枚の子供たちの絵と日本の小学生の絵60枚を展示します。チャリティーパーティーで集まった募金は、貧困問題に取り組むNPO団体に寄付します。「講演会」はカンボジアで伝統的織物技術の復活を支えるNPOの代表を始め様々な方にお越し頂きます。

問い合わせ

京都外国語大学 イマジン・ピース
浅野まりこ

〒6158558

京都府京都市右京区西院笠目町6

TEL : 075-322-6072 (月曜から金曜の午前9時～13時)

FAX : 075-322-6218

E-mail : imaginesupport@gmail.com

URL : http://www.kufs.ac.jp/MUN/index_j.html

栗東歴史民族博物館：滋賀県栗東市

テーマ展 平和のいしづえ 2007：2007年7月28日(土)～2007年8月19日(日) 於栗東の人々が経験した戦争や戦時下の生活をたどり、戦争と平和について考えます。

戦争遺跡見学会 (平和のいしづえ 2007 関連行事) 要申込 (先着順24名)

8月10日(金) 午前8時30分～午後7時

大阪府八尾市におかれた陸軍大正飛行場に関連する戦争遺跡を、現地で調査活動を行っておられる大西進さんの案内のもとで見学します。

問い合わせ

栗東歴史民族博物館

〒520-3016 滋賀県栗東市小野223-8

Tel: 077-554-2733

Fax: 077-554-2755

URL:

<http://www2.city.ritto.shiga.jp/hakubutsukan/>

大阪国際平和センター（ピースおおさか）

特別展「地球の上に生きる 2006-DAYS JAPAN フォトジャーナリズム写真展」が1階特別展示室で2006年11月21日～12月24日の会期で開催されました。

特別展「戦争体験画展—兵士が見た太平洋戦争少年が見た大阪大空襲」が1階特別展示室で2007年1月13日～4月10日の会期で開催されました。大田健一さんの南方戦の絵画とスケッチ、水速信孝さんの大阪大空襲と学童疎開の体験画、平岡潤さんの絵本『夜が明けて わたしと大阪大空襲』の原画などが展示されました。

特別展「守りたい、子供の命、子供の未来！—アグネス・チャンが見た世界と紛争下の子どもたち」が1階特別展示室で2007年4月20日～6月24日の会期で開催されています。

「12.8開戦の日 平和祈念事業」として、1階講堂で2007年12月3日に映画会が開催され、「美しい夏キリシマ」が上映されました。

「3.13 大阪大空襲 平和祈念事業」として、講演会「孫たちへの証言—戦争体験をどう伝え、どう受け継ぐか」が1階講堂で2007年3月10日に開かれ、「孫たちへの証言」編集者の福山琢磨さんが講演をしました。

第2回「ピースおおさか21世紀の子どもたちにおくる平和のつどい」が、1階講堂で2006年12月22日～24日に開かれ、アニメ「火の雨がふる」「カープ誕生物語 かつとぼせ！ ドリーマーズ」「ライヤンツ—のうた」が上映されました。

フィールドワーク「ユニバーサル・スタジオ・ジャパンの昔を訪ねて—『西六社』 境界を歩く」が2007年3月18日に開かれ、此花区の空襲被災地域を歩きました。

『戦争と平和：大阪国際平和研究所紀要』'07 Vol.16 が、2007年3月31日に刊行されました。横山篤夫さんの「大阪の忠霊塔建設」、福林徹さんの「第2次大戦時の大阪俘虜収容所について」、小山仁示さんの「1.19 明石大空襲をめぐる」、佐々木和子さんの「B29 部隊によるリーフレット(伝単)作戦」などが掲載されています。

Tel:06-6947-7208 Fax:06-6943

<http://www.peace-osaka.or.jp/>

堺市立平和と人権資料館：大阪

特別展「堺に住む！地球に生きる！—すべての生命はよい環境から」が、堺市教育文化センター図書館棟1階小ギャラリーで2006年12月1日～10日の会期により開催されました。

企画展「6000人の命を救ったビザ—外交官杉原千畝の決断」が2007年1月6日～3月30日の会期で開催されました。

企画展「紙しばいに見る日本—戦中・戦後のくらしと世相」が2007年4月1日～6月29日の会期で開催されました。

企画展「描かれた戦争体験」：7月1日(日)～9月29日(土)「当時の記憶を残したい」「伝えたい」という思いを込め、市民の方が描いた空襲体験画16点を中心に、戦時下の模型・資料も併せて展示しています。一人ひとりが「戦争の悲惨さ」「平和の尊さ」について考えていただく機会となるよう、ぜひ、ご来館ください。

開館時間 午前9時30分～午後5時

休館日 7月 2日、9日、16日、17日、23日、30日

8月 6日、13日、20日、27日

9月 3日、10日、17日、18日、24日、25日、30日

問い合わせ

平和と人権資料館（中区深井清水町1426、堺市教育文化センター内）

Tel: 072-270-8150

Fax: 072-270-8159

http://www.city.sakai.osaka.jp/city/info/_jinken/

平和人権子どもセンター：堺市

平和人権子どもセンターは10年を期に4月1日から教科書総合研究所として新たな出発をしました。和泉市の泉さんから明治の教科書93冊が寄贈されました。海軍で使用されたと思われる教科書を含むこの教科書の寄贈は、明治初期の自由発行自由選択の所蔵教科書が少なかつただけに、これからの研究に欠かせない資料がそろったこととなります。詳しくは「草の根」第31号を御覧下さい。

Tel&Fax: 072-229-4736

日本民家集落博物館：大阪・豊中市

日本民家集落博物館内のカルチュアはつとりで、企画展示「禁野火薬庫の調査」が2007年3月8日～21日の会期により開催されました。これは、枚方市にあった陸軍の禁野火薬庫の大阪府文化財センターによる発掘調査の成果報告で、銃砲弾、煉瓦、金具、軌道の枕木などの出土品、火薬庫当時の図面や写真、発掘の様子の写真などが展示されました。「禁野火薬庫の調査」の解説書、「カルチュアはつとり」10号が刊行されています。2007年3月10日に「調査成果報告会」が開かれました。
Tel:06-6862-3137 Fax:06-6862-3147
<http://www.occh.or.jp/minka/index.html>

舩松人権歴史館：大阪府堺市

企画展「境の町の被差別民」絵図にみる被差別民その2：2007年5月1日(火)～2007年10月30日(火) 於絵図は前近代身分制社会において被差別民の姿を知ることができる貴重な資料です。近世に描かれた「泉州堺之図」(1695年)等の絵図から、差別されていた人々の生活や仕事を読み解き、身分制社会の差別を紹介し、現代にも通じる差別問題を考える機会とします。なお、展示資料・解説にある「穢多」「非人」などの身分呼称は、差別的な意味で使用されてきましたが、その時代の差別状況を理解するための歴史的用語として、そのまま展示しています。
開館時間 午前9時～午後5時15分
休館日 日曜日(5月20日は臨時開館)、祝日
問い合わせ
舩松人権歴史館(堺区協和丁2丁61 人権ふれあいセンター内)
Tel : 072-245-2536
Fax : 072-245-2535

「世界の平和は子どもからー世界平和大使人形展」：三重県菰野町

2007年7月28日(土)～2007年8月26日(日)
於 パラミタミュージアム

「世界平和大使人形の館」をつくる会主催による、「世界の平和は子どもからー世界平和大使人形展」が開催されます。1979年の国際児童年に、世界に平和を願う大使として日本の子どもたちから世界各国に美しい日本人形が贈られました。その返礼として、57カ国から届けられた「世界平和大使人形」100余体を展示いたします。
問い合わせ
財団法人岡田文化財団 Paramita Museum

〒510-1245 三重県三重郡菰野町大羽根園松ヶ枝町21-6
Tel: 059-391-1088
Fax: 059-391-1077
URL: <http://www.paramitamuseum.com/>
E-mail: office@paramitamuseum.com

姫路市平和資料館：兵庫

収蔵品展「戦時下を語る資料たち」が2階展示室で2007年1月16日～3月25日の会期により開催されました。これは、当時の国民生活に思いをはせながら、そこに多くの尊い犠牲があったことと、現代日本の平和の尊さを考える機会になることを願って開催されたもので、「戦地へ」「庶民の暮らし」「学校生活」「空襲」などのテーマに分けて展示しました。2月11日に筑木義雄さんが「姫路空襲体験談」を話しました。

春季企画展「子どもたちが記録した『日常』ー戦時下の小学生日記から」が2007年4月6日～7月1日の会期で開催されています。これは、日中戦争、真珠湾攻撃を経て、日米の戦いが激化する1940年から1944年の時代に、当時の小学生が綴った日記を通して、戦時下の子どもたちがどのような日常生活をおくり、どのように見ていたのかを当時の写真パネルや日記に出てくる当時の現物資料をも使いながら紹介するものです。これら展示を通して、戦争の悲惨さや現代の平和の尊さを考えようというものです。5月5日には、駒田真紀さんによる朗読会が予定されています。6月22日には、講演会が予定され、田路信一さんが「姫路空襲体験談」を話されます。

Tel:0792-91-2525 Fax:0792-91-2526
<http://www.city.himeji.hyogo.jp/heiwasiryoy/>

広島平和記念資料館：広島

平和記念資料館更新計画を発表し、本館の保存方法や見学順路の変更案を策定しました。広島平和記念資料館は1955年の開館から51年を迎え、建物の老朽化への対応や耐震性の向上、また、展示についても、観覧の動線などに課題があります。このため、2003年度から検討してきた「広島平和記念資料館更新計画」がまとめられ、このたび広島市から発表されました。

この計画は、「被爆の実相」がより一層理解できる資料館をめざして、中長期的視点から建物整備や展示更新整備の今後のあり方を示したものです。発表された更新計画の要点は次のとおりです。

①本館の整備

・本館の歴史的な意義と、優れたデザインに対する建築的評価とを踏まえ、今後も積極的に保存・活用を図り、将来にわたり継承していく。

・国の重要文化財に指定されたことを踏まえ、老朽化への対応と耐震性の向上を図るため、「免震ゴムの設置を柱とした補強工事」をおこなう。

②展示の更新等

・来館者が被爆の惨状を展示している本館の観覧に十分時間がかけられるようにするとともに、観覧目的や滞在時間に合わせて展示を選択して観覧できるようにするため、観覧の動線や諸室の配置の見直しをおこなう。

・被爆の実相がより一層伝わるよう、展示の構成、手法を見直す。

・来館者の様々な気持ちを受けとめるため、「観覧後の心情に配慮した場」を設置し、「感情を整理し思いを巡らす空間」「表現したり人との触れ合いができる空間」の機能をもたせる。

・被爆の実相がより一層伝わるように、動線や構成、展示方法を見直す

③諸機能の充実

・情報資料室とホームページの情報発信機能を充実させる。

・ミュージアムショップを出入口付近に配置することなどによる来館者サービスの向上を図る。

④被爆体験証言活動などの充実

・現在の被爆体験証言者を支援するとともに新たな証言者を確保する。

・被爆者証言ビデオや市民が描いた原爆の絵、体験記などの被爆体験証言の収集を継続し、活用を図る。

・被爆体験継承の担い手を育成・支援する。

この計画の策定に当たり、2004年9月、学識経験者らを委員とする「広島平和記念資料館更新計画検討委員会（委員長一葉佐井博巳・広島大学名誉教授）」を設置して意見をいただきました。また、2005年11月から12月にかけて、作成した素案に対する市民からの意見募集をおこない、215件の意見が寄せられ、計画に「全ての人が利用しやすいユニバーサルデザインへの配慮」「被爆体験を継承するボランティアの育成」などの意見を盛り込みました。

今後は、この計画を具体化し、事業を実施に移すために、より詳細な展示整備等基本計画を策定します。

（「平和文化」No. 164より）

2006年度第2回企画展「林重男写真展」が東館地下1階の展示室（5）で、2007年2月15日～7月17日の会期により開催されています。

Tel:082-241-4004 Fax:082-542-7941

<http://www.pcf.city.hiroshima.jp/>

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館

企画展「しまつてはいけない記憶—助けを求める声を後にして」が地下1階情報展示コーナーで、2007年4月1日～2008年3月31日の会期により開催されています。

Tel:082-543-6271 Fax:082-543-6273

<http://www.hiro-tsuitokinenkan.go.jp/>

三良坂平和美術館：広島県三次市

柿手春三と広島時代の仲間たち 2007年9月1日(土)～12月26日(水) 絵画をとおして平和を追求した柿手春三とその仲間たちの作品を展示します。この機会に春三の心に触れてみてください。問い合わせ

三良坂平和美術館

広島県三次市三良坂町三良坂 2825 番地

Tel: 0824-44-3214

FAX: 0824-44-3214

福山市人権平和資料館：広島

企画展「『川に生きる人たち』：日本の河川の漁撈文化」が2007年1月17日～3月15日の会期により開催され、漁が行われる河川の地形的な特質や生息する魚の種類・生態にあわせて工夫された漁具や漁法・人びとの生活や文化を展示しました。

企画展「少年たちの記憶—中国から引揚げてきた漫画家12人の体験画集」が2007年4月25日～6月24日の会期により開催され、幼少年期を「満洲」（現中国東北部）で過ごし敗戦によって日本に引揚げてきた辛い体験を、漫画家12人が描いた絵を展示しています。

TEL:084-924-6789 Fax:084-924-6850

<http://www.city.fukuyama.hiroshima.jp/jinken/heiwashiryokan/>

高松市市民文化センター・平和記念室：香川

高松空襲被災写真などの展示の機会を増やし、市民に平和意識の啓発を図るため、初めて試みられた写真パネルのみの巡回展「第一回高松空襲写

真パネル巡回展」が、高松市生涯学習センター(まなびCAN) 1階のエントランスホールで、2007年2月20日～3月4日の会期により開催されました。
Tel:087-833-7728

<http://www.city.takamatsu.kagawa.jp/1794.htm>
↓

平和資料館「草の家」：高知

「平和の波」の取り組みが活発になされています。詳しくはホームページを御覧ください。

<http://ha1.seikyoku.ne.jp/home/Shigeo.Nishimori/>

ドイツ館：徳島・鳴門市

2007年度の行事予定は次の通りです。

■4月1日(日) ロスヴィタ・シュテゲ フルート演奏会

■4月8日(日) 第3回 イースター祭り

■4月15日(日) 佐藤郁帆&フルートコンサート

■4月24日(火)～5月13日(日) ドイツ観光ポスター展

■5月4日(金)、5月5日(土) ドイツワインまつり ジャズコンサート

■6月2日(土) ワインのタベ(アド・イン)

■6月7日(木)～6月10日(日) ドイツの風景 絵画展

■6月17日(日) 天羽明恵オペラ&ギターコンサート

■6月30日(土) 木版画ワークショップ第1回

■7月1日(日) 木版画ワークショップ第2回

■7月7日(土) セタコンサート

■8月11日(土)、8月12日(日) ドイツビール・ワイン祭り ジャズコンサート

■9月23日(日) オクトーバーフェスト

■9月29日(土)～10月14日(日) ハーネ花子さん書道展

10月7日(日) ドイツェス・フェスト in なると

10月27日(土)、10月28日(日) お茶会(鳴門市行事・国文祭)

11月3日(土) 「ドイツさん」朗読

11月19日(月)～12月24日(月) ドイツクリスマスマーケット展

11月23日(金) 栗田美佐コンサート

11月23日(金)～12月24日(月) ドイツのクリスマスマーケットフェア

12月2日(日) ドイツ館子どもクリスマス

会

12月初旬 クリスマスコンサート

■2月4日(月)～2月24日(日) ドイツ観光ポスター展

■2月10日(日) or 17日(日) バレンタインコンサート

■3月2日(日) かよこバンド

通信Ruhe(ルーエ やすらぎ)3月号には、板東俘虜収容所の所内新聞「ディ・バラック」全館の翻訳刊行についてかかれています。

Tel: 088-689-0099

doitukan@city.naruto.1g.jp

長崎原爆資料館

企画展「60年という歳月を越えて資料が語る被爆の実相—被爆60周年被爆資料・遺影・体験記全国募集より」が企画展示室で2006年10月4日～2007年3月19日の会期により開催されました。

Tel:095-844-1231 Fax:095-846-5170

<http://www1.city.nagasaki.nagasaki.jp/na-bomb/museum/>

長崎県美術館：長崎県長崎市

CAPA's WORLD ロバート・キャパ —その生涯と作品— 2007年7月13日(金)～9月2日(日) スペイン市民戦争取材中に撮影した伝説的な写真《崩れ落ちる兵士》により、一躍世界的写真家となったロバート・キャパ(1913-1954)。死後50年以上を経た現在においても、その名声はますます高まっています。本展では、東京富士美術館のコレクションから、スペイン市民戦争をめぐる作品群を中心に、青年期からインドシナ戦線取材中に亡くなる直前に写された最後の作品に至るまで、キャパの活動の全てをご紹介します。また、特別出品として、アメリカ軍の報道写真家ジョー・オダネル撮影の「被爆した幼子を背負う長崎の少年(1945年)」のオリジナルプリントが展示されます。

開館時間: 10:00～20:00(最終入場は19:30まで)

休館日: 第2、第4月曜日(休日・祝日の場合は火曜日が休館)

問い合わせ

長崎県美術館

長崎県長崎市出島町2番1号

Tel: 095-833-2110

Fax: 095-833-2115

E-mail: info@nagasaki-museum.jp

URL: <http://www.nagasaki-museum.jp/>

沖縄県平和祈念資料館

子ども・プロセス企画展「人権について考えよう」が2006年11月27日～12月24日の会期で、「国際理解を深めよう」が2007年1月15日～2月25日の会期で、それぞれ開催されました。

特別企画展「沖縄戦における住民動員一戦時下の根こそぎ動員」が、分館の八重山平和祈念館で2007年1月16日～2月25日の会期で開催されました。

Tel:098-997-3844 Fax:098-997-3947

<http://www.peace-museum.pref.okinawa.jp>

ヌチドゥタカラの家 反戦平和資料館：沖縄

わびあいの里は、沖縄戦終結から40年目の1984年6月23日に開設されました。「わびあい」とは、家庭も社会も国も、平和で豊かに暮らすためには、わびあいの心によってしか実現しないとの阿波根さんの信念から、若き日に学んだ京都の一燈園で実践されている「三詫びあい」から名づけられました。阿波根さんは、里で障害者に仕事を提供するとともに、人々が土に親しみ、人間形成、交流の場となる「福祉村」づくりを目指しました。

里には、「やすらぎの家」と「ヌチドゥタカラの家」(反戦平和資料館)の二つ施設があります。「やすらぎの家」は、身障者、健常者、お年寄り、子どもらが、互いに生きがいを求め、助け合い、能力に応じて生産につとめ、心づくり、体づくりのためのやすらぎの場として建てられました。ここは、故阿波根と平和運動を共にしてきた館長の謝花が里を訪れた人たちに、平和を語る場所でもあります。

「ヌチドゥタカラの家」は、同年12月8日に開館しました。平和のためには戦争の原因を学ばなければならないという阿波根さんの考えを具体化したものです。人間の生命を粗末にした戦争の遺品と平和のためたかかった人々の足跡を紹介しています。土地闘争の中で収集した米軍の爆弾、原爆模擬爆弾、鉄線、標識や戦争直後の生活用品や闘争を記録した写真や土地を守る会の旗などを展示しているほか、戦死した日米の兵士を慰霊した「無縁洞」が安置されています。壁には「すべては剣をとる者は剣にて亡ぶ(聖書) 基地をもつ国は核で亡ぶ」という阿波根さんの信念と、非暴

力に徹するたたかひの基本となった伊江島土地を守る会の「陳情規定」が書かれています。

「伊江島通信」が発行されていますので、御覧下さい。

財団法人 わびあいの里

沖縄県国頭郡伊江村字東江前 2300-4 〒905-0502

0980-49-3047/Fax 0980-49-5834

E-mail wabiai@giga.ocn.ne.jp

<http://www3.ocn.ne.jp/~wabiai/index.html>

沖縄県立博物館新館・美術館：2007年11月1日開館

那覇市おもろまちに建設中の「県立博物館・美術館」が11月1日に開館することが決まった。博物館常設展示では、「海と島に生きる 豊かさ、美しさ、平和を求めて」をテーマに、沖縄の自然や歴史、文化を時間軸で展開する総合展示と、その周りに自然史や考古、美術工芸、歴史、民俗の部門展示を展開する。美術館は沖縄の芸術家の絵画や写真を中心に展示。開館までに900点を目標に作品収集する計画だ。仲村守和県教育長が18日、発表した。開館を記念し、11月1日から博物館では「人類の旅 港川人の来た道」を開催する。(2007年5月9日琉球新報)

問い合わせ

沖縄県教育庁文化施設建設室

〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3丁目1番1号

管理 Tel: 098-941-8200 Fax: 098-941-3530

博物館 Tel: 098-851-5401 Fax: 098-941-3650

美術館 Tel: 098-851-5402 Fax: 098-941-3730

E-mail: aa318400@pref.okinawa.jp

URL:

<http://www-edu.pref.okinawa.jp/kensetsu/index.html>

海外のニュース

Women Peacemakers：イギリス

Jody Williams 女史が第2回 PeaceJamに参加するため、3月初めに本学を訪れました。3月2日には公開講座を行い、その後2日間、地元の若い学生を対象に、ピースメーカーとは何かについてワークショップを行いました。Williams 女史は1997

年に地雷撲滅の国際キャンペーンの功績により、ノーベル平和賞を受賞しました。

Williams 女史の来学に合わせ、そして女性ピースメーカーを称えるという意味で、本学の第2ギャラリーでは互いを補うような形で二つの展示会が行われました。そのうちの一つ「わが祖国は全世界なりー女性ピースメーカーたち」は世界中の多くの女性や女性グループによる今日までの平和活動の感動的な物語をブラッドフォード平和博物館が展示したものです。Virginia Wolff の有名な言葉をモットーとして引用し、母、子育てをする人、介護者として、国境を越え戦争に反対し、平和を多方面から促進させてきた女性についての展示会でした。

展示会で取り上げられた女性たちは、17世紀クエーカー派主義の母 Margaret Fell、19世紀の女性平和運動の著名なパイオニアである Priscilla Peckover、Vera Brittain、更にドイツの芸術家 Kaethe Kollwitz、反核、環境運動家の Petra Kelly、Chemical welfare についての評論家のはしりである Clara Immerwahr と Gertrude Woker、死の床で折った鶴と共に平和のシンボルとなった広島的女学生の佐々木貞子、そして近年のノーベル平和賞受賞者である Shirin Ebadi (イラン)、The Mothers of the Plaza de Mayo (アルゼンチン)、先の戦争で荒廃したユーゴスラビアで実用的な援助活動を行った Women's Aid for Peace、イギリス国内の反核兵器運動派の Greenham Common Women、Trident Ploughshares など、他の多数の平和活動家たちの活動と共に彼女たちの活動も記録されました。28の展示パネルのうちの一つとして、戦争の女性への影響と女性の平和的紛争解決への貢献について初めて言及した国連安保理決議 1325号についての展示がされました。

女性ピースメーカーの展示パネルの一つは、オーストリアの作家で 1905年にノーベル平和賞を女性として初めて受賞した Bertha von Suttner (1843-1914) の特集でした。彼女は19世紀終わりから20世紀初頭に掛け、最も雄弁にヨーロッパ列強間の戦争の危険性について警告した一人です。1889年出版の「Lay Down Your Arms」という彼女の小説は、さまざまな国での平和活動の発展を促し、そのため彼女は図らずもオーストリア平和協会会長、ドイツ平和協会の共同創立者となりました。当時は、(強く誇り高い軍の伝統を持つドイツ帝国やオーストリア・ハンガリーでの) 戦争と平

和についての議論などはもちろん、女性が公の場で活動することはまだほとんど無く、そのような中、彼女は敵意や愚弄に立ち向かわなければなりませんでしたが。しかし、当時の国際的な平和運動の中、彼女はその自らの立場により、唯一、1899年の第一回ハーグ平和会議の開会時に傍聴席に入ることを許可されました。更には、彼女の個人サロンには政府外交官やハーグ平和会議に出席したその他代表者がしばしば訪れ、その結果、国家間の戦争を回避する手段として、常設仲裁裁判所が設置されました。また、彼女は平和のために「あの世から」何かをするよう友人の Alfred Nobel を説得し、その結果、ノーベルの遺言で明かされたよう、ノーベル平和賞が設立される運びとなりました。

この卓越した女性のこれらの、そしてその他の経歴の詳細については、もう一つの展示である「Bertha von Suttner – A Life for Peace」の中で語られ、描かれました。この展示は、2005年の Suttner のノーベル平和賞受賞 100周年記念にあたっての、オーストリア外務省の委託によるもので、Suttner の波乱に富んだ人生の主な奇跡が16枚の大きく色彩豊かなパネルに写真、当時の時事風刺漫画、印象的な引用句と共に年代順に記されました。オーストラリア、ドイツの両郵政当局が2005年発行の記念切手を発行、ドイツ造幣局が Bertha von Suttner と彼女の有名な小説の題名が彫り込まれた 10ユーロの記念銀貨を発行しました。ユーロ発行以来、Suttner の肖像画はオーストリアの2ユーロ硬貨に使われています。(オーストリア1ユーロ硬貨にはモーツァルトが使われています。)ブラッドフォードの Bertha von Suttner 展では、これらの記念切手や記念硬貨、そして、Bertha von Suttner に因んだブリュッセルのオフィスビルの名称変更に関連した EU の欧州経済社会評議会の発行物など、Suttner ゆかりの品々がケースに展示されました。

「Women Peacemakers」および「Bertha von Suttner」についての詳細は、Peter Nias (peacemuseum@bradford.gov.uk) または、Peter van den Dungen (P.Vandendungen@bradford.ac.uk) までお問い合わせください。



Karen Women's Organization (KWO): タイ

P.O Box 19, Mae Sariang 58110, Thailand
Email: kwocentral@tttmaxnet.com, Website:
www.karenwomen.org

2007年2月12日

プレスリリース

カレン州におけるビルマ政府のテロキャンペーンで女性が直接標的に。

Karen Women's Organization による「テロ状態」と題されたレポートは、ビルマのカレン州全体に広がる軍事政権の部隊による女性を標的とした広範囲にわたるテロ攻撃の生々しい証拠を掲載しています。

このような残虐行為が続く中、KWO は、現ビルマ政権に即座の攻撃停止と民族自治州からビルマ軍を撤退させるべく、各国が一致団結し国際的な圧力を掛けること訴えています。

KWO 秘書官の Naw Zipporah Sein 氏は、「先月の対ビルマ国連安保理決議における中国とロシアの拒否権行使と南アフリカの反対票について、大変残念に思います。」「これでは軍事政権のカレン州におけるテロ行為を承認しているのと同じことです。彼らは私たちに死刑を与えているのです。」とコメントしています。

レポートは強姦、殺人、拷問、強制労働など、主に過去2年間に190以上の村で40を超えるビルマ軍人によって行われた4000件を超える虐待のケースを記しています。

2006年に繰り返し行われた集団強姦は2004年のKWOのレポート「Shattering Silence」によって暴露された組織的な性的暴力がまだまだ続いていることを浮き彫りにしています。

レポートの中の痛ましい証言は、女性がわが子を殺されるのを目撃したり、人間地雷除去機として女性が使われたり、妊婦が軍のために重い物を運

ばされ流産したりといったことを述べています。虐待の多くは、2006年に25000の村人を強制退去に至らせ、そして現在も続いている、東ビルマにおける軍の攻撃の最中に行われました。

レポートのために情報を収集した Blooming Night Zan は、軍による攻撃が現在も続いていることを強調しています。「インタビューした何百人もの人から個人的な悲劇を聞き、胸が張り裂けそうでした。人々が生き残ろうとベストを尽くしているのに、このような生き地獄が未だ存在すると知り、とても耐えられません。国際社会はこのような残虐行為を止めるため、直ちに行動を起こさなければなりません。

レポート全文は www.karenwomen.org でご覧頂くことができます。

更に詳しいお問い合わせは下記までお願いいたします。

Naw Zipporah Sein

Tel: 66-81-952-7145

Blooming Night Zan

Tel: 66-81-973-6471

Naw Khaing Mar Kyaw Zaw

Tel: 66-85-734-8825

「Art in Palestine」イギリス人芸術家 Paul Gent 氏による記事

古いボロボロの車がレバノンのバールベック中心部に向かう主要幹線道路を通り過ぎてゆく。その車が止まり、私のほうに向かってバックしてくる。ドライバーは窓から「おい、コーヒー飲んで、マリファナでも吸うかい？」と私に呼び掛けた。私は躊躇いながら車に乗り込んだ。

私は、この日から、パレスチナへ行ってみたいと思うようになった。いや、その瞬間にではない。街を出て、荒廃した郊外へと向かいながら「何でこの変な車に飛び乗ってしまったんだろう？」と、そればかり考えていた。私は少し、そしておそらく見境無く神経質になっていた。その町はヒズボラによって統治されていて、軍人が私に微笑むことは、私が滞在している間、一度も無かった。そのドライバーの家では、彼の奥さんがアラビアコーヒーを入れてくれた。私は、彼が二人の子供に良い教育を受けさせるために十分な金を稼ぐのに苦勞していることや、彼のパレスチナに対する見解を知った。「俺はユダヤ人やイスラエルを憎んではない。ただ奴等の政府がパレスチナに対して

やっていることが嫌いなだけだ。」私は、その後芸術家としてパレスチナで過ごした何年かの間、この言葉をしばしば思い出すことになる。

パレスチナでの暮らしは、「保安壁」や（地元の男性が示すように）西岸をピザのように切り分けてしまう要塞化された検問所を伴う入植地の拡大に見られるよう、私が初めてパレスチナを訪れた6年前から悪くなる一方で、私は、自分が、騒がしく元気な子供たちと一緒にベツレヘムの壁に絵を描くことで成し遂げようとしていることを再度評価し直さなければならなくなった。

地元の家族によって運営される「Tent of Nations」という団体のためにボランティアをすることに決めたとき、私の焦点も定まった。4つのイスラエルが侵入し作った入植地に囲まれた彼らの小さな農場に、私は近くにある石で（若いオリーブの木を食べるヤギの侵入を防ぐため）壁を作るよう、一人残された。一つずつ石を積み重ねていく度、反対にある丘でイスラエルが必要な機械という機械をすべて使い、その一家所有の土地に少しずつ侵入しながら次々と家を立てていくのが目について仕方が無かった。私が即座に思うことは壁を作るのを止めることだったであろうが、パレスチナ人から学んだことがあったとすれば、それは我慢ということだっただろう。すぐに私は、悪い大儀のために大きな事を起こすより、良い大儀のために小さいことをなすほうが良いということを感じた。少なくとも、夜よく眠られるようになるのだ。

もちろん、壁に絵を描くことでパレスチナ人が土地を失うのを止めることができるわけではないが、少なくとも目標が現実的ならば成功する確率は高いだろう。現在、私には、地元の子供のために壁画を計画する際の三つの目標がある。

一つ目の目標は無邪気で創造的な楽しみを持つということである。パレスチナの子供たちはあまりにも急速に成長してしまう。たとえばAyda 難民キャンプの子供たちは、イスラエル兵に石を投げつけ、そして兵士たちに追い回される「軍隊とアラビア人」という不吉に危険なゲームをするのである。（彼ら自身たいていの場合若い）イスラエル兵たちもこのゲームを好んでする。このゲームによって壁画が一度以上破壊され、芽を出しかけた若い芸術家がうかつにも催涙ガスを掛けられたり、爆発音で耳が聴こえなくなったり、時にはゴム弾

で撃たれたりということもあった。

第2に、芸術は間接的に若者の胸のうちを知ったり、犠牲者、国粹主義、平和と和解、教育などといったテーマに挑んだりする際により手段となり得る。私は、こういった形式張らない会話を通して、多くのことを学んだ。私は、イスラエルの占領問題から話題を逸らそうと、Ambrogio Lorenzetti の「Effects of Good Government on Town and Country」と「Allegory of Bad Government and its Effects on Town and Country」を基にした。私たちは、女性の権利、家庭内暴力、犯罪、汚染やゴミなどの健康と環境問題に注目した。

「Tent of Nations」から来た Daoud Nasser は非暴力を通じてパレスチナ人の強さを再度作り上げることを強く感じていた。「私たちは、協力しあい、自尊心を保つことで強くあり続けることが必要だ。くだらないことを一々気にしないことは決して難しくなく、そうすることで僅かながら私たちがまだ諦めていないということを示すことができるのだ。」と彼は言った。

第3に、イスラエルの占領下での醜さの中において、芸術は美の称賛になり得るということである。ベツレヘムの SOS 孤児院の子供たちと一緒に壁画を描いたとき、（パレスチナではよく見る光景である）建物の廃材やがらくたが山積みになっている埃っぽい大通りに子供たちを連れて行った。私たちがモザイクに使う古い台所のタイルを探していたとき、興奮した叫び声が聴こえた。一人の男の子が見つけた物を見せながら私に向かって走ってきた。それは、施釉されたすばらしく美しい青のタイルの小さな破片で、くすんだ薄いピンク、茶色、グレーのタイルが多い中、珍しい発見だった。

確かに、地域の壁画を作るということは中東で苦しんでいる人々のためにより良い環境を作るための小さなステップでしかない。しかしながら、壁画作成はほとんどの場合成功し、よく見てみると、大きなメディアによる過大なプロジェクトがしばしば失敗に終わるのに対し、パレスチナ人、イスラエル人、そしてその他の国の人たちによって行われている平和と和解を保つための何百という小さなプロジェクトがイスラエルとパレスチナに存在することがわかる。

Paul Gent's のパレスチナにおける働き、写真、作品については、www.linkpalestine.org をご覧

ただか、もしくは E-mail にて直接 Paul (pablojeny@yahoo.com) までお問い合わせください。

Tent of Nations work with peace and reconciliation in Palestine の詳細については、www.tentofnations.org をご覧ください。

平和博物館 (コスタリカ)

2003 年、Arias Foundation for Peace and Human Progress はサン・ホセのダウンタウンの好立地に Museum for Peace をオープンしました。Museum for Peace はその一角が歴史的な Plaza de la Democracia (民主主義広場) 敷地内にあり、国家立法議会と国立博物館の間に位置し、最高選挙法廷、国立公園、最高裁判所から徒歩すぐのところにあります。

Plaza de la Democracia はコスタリカの民主主義政権が成功した初の世紀と 1989 年に当時のコスタリカ大統領であった Oscar Arias Sanchez 博士によって開催された南半球サミットを記念するために作られました。サミットの目的は、地域の和平プロセスの促進でした。

Museum for Peace は対話、合意、和解の文化を検証し、単に武力衝突や暴力の無い状態ではなく、個人および集団としての、そして、物質的および精神的な面での人類の進歩の形としての平和という概念に基づいています。

博物館は一般および研究者に開放されています。2 階建ての建物の中では Esquipulas II での折衝や和平調停そして地元および国際的報道に及んだ影響についての計り知れないほど貴重な資料を目にすることができます。

1 階には Arias Foundation の軌跡、基本方針、成果などについて展示されています。ここでは、Arias Sanchez 博士が受賞したノーベル平和賞のメダルのレプリカを見ることができます。「People and peace」のような、参考になるフィルムのほか、映写室には著名な写真家である Michelle Pelletier による過去のノーベル平和賞受賞者たちの写真の展示がしてあります。

2 階には、中米と Arias Plan for Peace の歴史の

記憶を再構築する目的の展示が、見学者に解り易く接し易い形で設けられています。和平プロセスの展開についての展示は、中米の歴史的発展の地理、政治、社会、経済、文化に沿った簡単な説明から始まり、冷戦の地政学的背景や誰によって何の目的のために等、軍事暴動内戦を引き起こした背景が全体的に把握できるようになっています。

展示は中米の近代の歴史にもおよび、1980 年代の政・軍事闘争に焦点を当てています。また、学生と教師には中米の和平プロセスをより理解しやすくするための無料の案内冊子が配られます。

中米は長年長引く同胞間の争いによる惨事に苦しんできました。武力闘争を終わらせるために、幾つもの大変な努力がなされてきました。その内の一つは、メキシコ、パナマ、コロンビア、そしてベネズエラによる、いわゆる Contadora Group の結成でした。これにより提案された平和協定は 1984 年にパナマに承認されました。Contadora Group に続いて Support Group がアルゼンチン、ブラジル、ペルー、ウルグアイによって結成されました。

1986 年に中米地域の大統領らによる会談が始まり、その交渉は、和平プロセスを開放した 1987 年 8 月 7 日グアテマラシティでの Esquipulas II 和平協定調印時の祝典が執り行われた瞬間まで進められました。

Museum for Peace 所蔵の証拠書類や史料のほとんどはデジタル形式での閲覧が可能です。見学者や研究者は Arias Foundation の出版物のデジタルカタログにアクセスすることができます。Arias Peace Plan についてのオーディオ・ビジュアル資料、中米の和平プロセスを取り上げた文書資料や新聞の電子アーカイブも利用できます。

展示会：現在行われている展示会はありません。

<http://www.arias.or.cr/en/museum.php>

ベツレヘム平和センター：パレスチナ

綱領

当センターは平和、民主主義、宗教上の寛容、多様性を普及、促進しなければならない。

当センターの美術、装飾、プログラムや行事にはパレスチナ文化が反映されなければならない。

当センターはいかなる宗教、信条、信仰、政党、派閥、民族集団とも提携してはならない。
当センターのプログラムや全ての行事は専門的に行われ当センターの価値感や精神に基づくものでなくてはならない。

構想

Bethlehem Peace Center は：
パレスチナの人々によって保有され運営されなければならない。

ベツレヘムの人々が集まり学ぶ場でなければならない。

地元の人々やパレスチナを訪れる観光客を対象としたプログラムや行事を提供しなければならない。

国際的に認められ、尊敬を集めなければならない。

パレスチナにある他の文化センターに活気を与え、援助しなければならない。

センターについて

Bethlehem Peace Center はベツレヘム市にある文化センターで、Church of the Nativity と Mosque of Omar との中間にある Manger Square の隣に位置します。

当センターは Bethlehem Municipality によって保有、運営されています。当センターは独自の審議会を持っています。審議会は Bethlehem Municipality Council、Bethlehem University、Bethlehem Chamber of Commerce and Industry から派遣されたメンバーにより構成されています。Bethlehem Peace Center の構想は 1996 年に生まれました。1997 年 11 月 4 日 Swedish International Development Cooperation Agency (Sida) は Municipality of Bethlehem と Bethlehem Peace Center の建設と Manger Square の改修についての協定を結びました。1998 年 6 月には古い警察署が解体され、1999 年 11 月 28 日の完成に向け、新しい Bethlehem Peace Center の建設が 1999 年 8 月 31 日に始まりました。完成記念式典は 1999 年 12 月 9 日に執り行われました。しかしながら、公式な Bethlehem Peace Center の開館は 2000 年 7 月 1 日となりました。

Bethlehem Peace Center 今日まで至る Sida の財政支援に感謝いたします。

施設

ロビー

観光客と地元の人々がふれあい、談話し、くつろぐことのできる友好的な空間です。文化的親善と理解を促進するため、Bethlehem Peace Center は様々なマルチメディアステーション（タッチスクリーンとスライドショーをロビーに配置）を設ける予定です。ロビーに入ると受付、観光案内オフィス、本屋、そしてレストランが見えます。

受付

受付係は全ての訪問者を歓迎し、必要な情報を提供したり、適切な場所や行事に案内したりといったお手伝いをさせていただきます。

観光案内オフィス

当オフィスは Ministry of Tourism and Antiquities によって運営されています。オフィスでは立ち寄られた観光客の方々に必要な情報やベツレヘムとパレスチナについてのポスター、パンフレットなどを配布しています。

レストラン

観光客と地元の人々のために近日オープンする予定です。レストランでは伝統的なパレスチナ料理やベジタリアンや特別な要望にも対応した世界の料理を提供します。

(現在は特別なイベントなど、必要に応じて開店しています。)

Women, Youth & Children Dept.

大きなホール、小さな台所、広い部屋、トイレと収納があります。この広い空間では、女性、若者、児童のための行事やワークショップのほとんどが行えるようにデザインされました。少し大きめの屋根つきバルコニーの隣りに位置したこの空間には通用口もあり、他のエリアから自立した感があります。

ホール

200 席あるホールは様々な催しに使用できます。コンサートや演劇、映画、討論会、会合、ワークショップ等に利用することができます。

展示室

センターのメイン機能として展示室があげられます。面積、高さがそれぞれに違う 3 つの展示室は互いに連結しています。これらのホールは地域的なものから国際的なものまで、ありとあらゆる展

示会に使われます。またセンター内の他の場所でも展示品を展示することができます。

本屋

Bethlehem Peace Center のロビーの片隅にある本屋は、ベツレヘムの隠れた目玉です。市民も旅行者も本屋に立ち寄り、幅広い種類の書籍や本場パレスチナの工芸品をご覧いただくことをお勧めします。

本屋には英語、アラビア語の小説や学術書などのオリジナル・コレクションやベツレヘム、パレスチナ、中東の見て楽しめるような美しい本が置かれています。また、英語、フランス語、アラビア語の児童選書も置かれています。

珍しい写真、地図、ポスター、ギフト品、刺繍品、土産、雑誌、新聞もあります。一見の価値あります。

図書館

立ち上げたばかりの図書館・ドキュメンテーションセンターはベツレヘムについての書籍と資料が揃っています。

休憩所と洗面所

観光客ならびに地元の人のための公衆洗面所が設置されています。また、観光客のための休憩所も設けられております。洗面所と休憩所はロビーの下の階にあります。呼吸系所には公衆電話が設置されています。

この地方で見つかったモザイクがあります。現在このエリアは来館者には公開されていません。このエリアに Archeological Museum を作るため、Ministry of Tourism and Antiquity と協力して発掘作業が行われています。

<http://www.peacecenter.org/index.php>

住所

Manger Square

P.O.Box 1166

Bethlehem – Palestine

電話 : +972-2-276-6677

ファックス : +972-2-274-1057

電子メール : info@peacecenter.org

Nuclear Free New Zealand と World Court Project 展 : ニューゼaland

ニューゼalandの非核法は 2007 年 6 月 8 日に

20 周年を迎えます。この歴史的軌跡とクライストチャーチがニューゼaland初の非核都市となつての 25 周年を祝うため、Peace Foundation の Disarmament and Security Centre は Nuclear Free New Zealand 展を Canterbury Museum にて 5 月から 6 月にかけて行います。

この展示会では、50 年間に及び収集された、キャンペーン用の垂れ幕、キルト、写真、ステッカー、T シャツ、バッジ、切手、出版物、請願書、音楽などの反核と平和の貴重な品々が展示されています。展示物のほとんどがニューゼalandと南太平洋の非核のために尽力した多岐に渡る平和運動家から提供された現物です。

この展示会は退官したクライストチャーチの判事、Harold Evans によって 1986 年に始められ、ニューゼalandの平和運動家によって動かされた、歴史的な World Court Project にも焦点を当てています。このプロジェクトは世界最高峰の裁判所で取り上げられ、1996 年には国連の国際司法裁判所が「核兵器による威嚇や攻撃は基本的に違法である」、そして核保有国は核兵器庫を無くす義務があるとの見解を示すに至りました。

2002 年以来 Peace Foundation は、クライストチャーチをニューゼaland初の平和都市として宣言するための働きの一環として、平和アーカイブ所蔵品を集めてきました。クライストチャーチ市は、非核 20 周年を祝賀行事の開会展覧会として、2002 年 3 月長崎、広島市長による展示会を開催しました。この展示会は、その後ニューゼaland全国の 16 の博物館や美術館を巡りました。故伊藤長崎市長は 2002 年 5 月にウェリントンにおいて展示会を開会し、クラーク首相に会いました。

2000 年から 2002 年の間、軍備縮小と核不拡散についての国連調査のニューゼaland政府の民間専門家として、草の根平和団体から得たアイデアを最終文書に組み込むことができました。次の提言を含め、34 の提言が 2002 年時点の全ての国連加盟国によって、満場一致で採択されました。

「内政の指導者たちには、市民たちと協力しつつ、平和博物館、平和公園、ウェブサイト、ピースメーカーや和平交渉についての冊子の作成などを通じて、UNESCO Cities for Peace Network の一部としての平和な都市を構築するよう努めることが望まれる。」

この決議案は地元の市民団体の連合と市議会、博物館、公立図書館、大学が Peace City 宣言で採択された様々な提案を実現するための協力を促しました。私たちは、これらの団体と中央図書館内の平和コレクション、大学図書館の文書、写真、音声コレクション、そして博物館内に平和運動の記念品所蔵庫を作るための正式な合意をしました。これらのコレクションの中から Nuclear Free New Zealand 展のための展示品が選ばれました。

2004 年には、世界で最も素晴らしい政治家の一人であるモハンダス・ガンジーの公人としての人生に関する個人的見解が現れた写真のユニークなコレクションを作り上げるため、私たちは大学と博物館と密接に協力しました。展示会で飾られているガンジーの 34 の白黒写真は 1940 年代にボンベイ在住の写真家、D R D Wadia によって撮影されました。写真のネガは Wadia の孫である Canterbury 大学の宗教学部長の Aditya Malik 博士によってニュージーランドに運ばれました。Malik 博士は「これは、インドの非暴力という価値感とニュージーランドの非核の伝統を結びつけるものである。」と言いました。

展示会では、ガンジーが監禁されていた時に織ったハンカチやガンジーとネール首相から写真家の妻に宛てられた手書きの手紙などユニークな記念品が展示されています。今までのところ、この展示は国内 5 箇所の博物館で公開されました。写真のコピーはガラスにははめられておらず、従って運びやすくなっています。写真はガンジーの人生と功績を描いたビデオと共に展示する形で高校に貸し出しています。

現在、博物館と Peace Foundation の間には 2 年毎に似たような展示会の主事を務める協定を結んでいます。将来の展示会テーマとしての候補には、道義心に異議を唱える人や太平洋におけるフランスの核実験の反対などがあります。

先の展示会の成功から、Nuclear Free New Zealand の国内外の巡回を望む声があります。これらの資料についての更なる情報が必要な方は、kate@chch.planet.org.nz までお問い合わせください。

「刀を鋤に」平和センター・ギャラリー：
デトロイト

しばらく閉鎖していましたが、再開しました。昨年はペルー先住民女性の芸術作品の展示や、南アフリカの女性の刺繍の展示をしました。

5 月には子どもの権利条約に関連した子どもの絵画が展示されました。

Swords Into Plowshares Peace Center and Gallery
33 E. Adams · Detroit · Michigan · 48226 · (313) 963-7575

<http://www.swordsintoplowsharesdetroit.org/>

国際平和ポスターセンター：イタリア

イタリアのボローニャに、国際平和ポスターセンターがあります。1993年に創立され、約3千枚のポスターがあります。恐らく世界で最も多く平和ポスターを集めたセンターでしょう。

日本から送る際、英文訳を付けて送るようにしてください。

International Pacifist Poster Documentation Centre

Via Canonici Renani, 8 40033 Casalecchio di Reno, Bologna, Italia

<http://cdmpi.interfree.it/>

Tel: 051 6198744-051584513

国際赤十字・赤新月博物館：ジュネーブ

国際赤十字・赤新月博物館：ジュネーブ

現場、ソルフェリーノからグアンタナモまで

世界の歴史を作り上げる大きな出来事をたどった赤十字国際委員会保管写真は言葉では伝えきれない現実を映し出します。

ソルフェリーノからグアンタナモまで、88枚の人道イメージ

Musée international de la Croix-Rouge et du Croissant-Rouge

17, av. de la Paix

CH-1202 Genève

www.micr.org

Tel +41 22 748 95 11

Fax +41 22 748 95 28

開館時間: 10:00 - 17:00 (火曜日を除く)
臨時展示会は入場無料
売店、食堂あり
Cornavin 駅から8番のバス (OMS もしくは Appia 行き) で Appia 停留所で下車。障害者アクセス用設備あり。

International Museum of Peace and Solidarity : サマルカンド

国際博物館デーを記念し、5月17日にサマルカンド州立ウズベキスタン文化歴史博物館に於いてサマルカンドの2750年祭奉納のための新しい国際展示会、「世界はサマルカンドを祝う」を始めました。たくさんの展示参加品(メッセージ、詩、写真、芸術品、本など)が世界中の人々から寄せられました。式典にはスイス、フランスからの招待客が参列し、テレビ局によってその様子が収録されました。

8月には新たな展示部門「各大陸のサマルカンド」を追加する予定です。

Samarkandiana-project は当博物館の常設プログラムです。

<http://www.museum.com/jb/museum?id=26810&show=10&event=4103>

ご協力とご支援に改めて感謝いたします。
いつの日か2750年の歴史を誇るサマルカンドでお会いしましょう。

最大の敬意を込めて
Anatoly Ionesov

Anatoly Ionesov, Director
International Museum of Peace and Solidarity
P.O. Box 76, UZ - 140100 Samarkand
Republic of Uzbekistan.
Phone/ fax: +998 (66) 233 17 53.
Web: <http://peace.museum.com>
<http://www.civilsoc.org/nisorgs/uzbek/peacemsm.htm>
<http://www.aliaflanko.de/urbo/samarkand/samarkand.html>
http://www.esperanto-sat.info/article.php?id_article=357
E-mail: imps86@yahoo.com or imps@rol.uz (普通

のテキスト(.txt)フォーマットでの文章のみでお願いいたします。アタッチメントは添付されませんようお願いいたします。ご理解いただきありがとうございます。)

出版物

平和の文化 8つのキーワード: 平和の文化をき
ずく会編 平和文化 2006

「米軍再編と前線基地・日本」木村 朗編 凱風社 ¥1400

IPSHU 研究報告 No. 37

国際平和活動における DDR(Disarmament 武装解除、demobilization 動員解除、reintegration 再統合)- 平和維持と平和構築との複合的連動に向けて

Oct, 2006 広島大学平和科学研究センター

IPSHU 研究報告 No. 38

国際平和活動における民軍関係の課題

April, 2007 広島大学平和科学研究センター

Peacemaker 101: careers confronting conflict
edited by Roy J. Eidelson, Jena Laske and Lina Cherfas. Solomon Asch Center for Study of Ethnopolitical Conflict University of Pennsylvania 2007

Peace Studies and Peace Discourse in Education
by Institute for Peace Science, Hiroshima University & Tomsk State Pedagogical University(Russia) Jan 2007 (in English)

平和文化研究 第28集 長崎総合科学大学 長崎平和文化研究所 2006

時代を生きて 文集・鎌田定夫

「時代を生きて」刊行会 鎌田信子

Tel & fax: 095-838-3542

お願い

2007年度になりました。前納されている方以外は、請求と振替用紙を同封しております。年会費2000円の納入をお願いいたします。2006年度以前会費を未納の方は未納分も合わせて納入下さい。

郵便振替

加入者名

口座番号

メーリングリスト開設のお知らせ

2006年12月に「平和のための博物館・市民ネットワーク」のメーリングリストを開設しました。

「平和のための博物館・市民ネットワーク」は「平和のための博物館」の関係者による個人加盟の組織です。経験交流などを通じて、「平和のための博物館」の発展に寄与していくことが課題です。

メーリングリストは、参加を希望する「平和のための博物館・市民ネットワーク」の個人会員によって構成されます。メーリングリストには、ニュースでは載せきれない、「平和のための博物館」の展示会、事業、刊行物などのお知らせをお寄せいただいています。ただし、「平和のための博物館」といっても、設立経緯、存立基盤、博物館の課題などはさまざまです。それぞれの立場を尊重した交流をしていきたいと思えます。そのためには、他の博物館への中傷や、打撃的な批判はなさないようにしてください。

参加ご希望の方は事務局の山辺までメールアドレスをお知らせ下さい。

おことわり

無署名の記事は、編集者の責任でまとめたものですが、署名記事は執筆者の責任で書かれたもので、「平和のための博物館・市民ネットワーク」の事務局や編集者の見解を、必ずしも示すものではありません。